

文久年間の小笠原島開拓事業と 本草学者たち

—小野苓庵(職懋)・宮本元道・井口栄春・栗田万次郎・阿部櫟齋—

平野 満

はじめに

1. 小笠原島の発見と開拓前史
2. 文久年間の小笠原島開拓事業の開始
3. 小野苓庵(職懋)による小笠原島の調査
4. 宮本元道による記録
5. 栗田万次郎と井口栄春
6. 阿部櫟齋と天保8年の無人島(小笠原島)渡航計画
7. 阿部櫟齋の小笠原島調査と殖産事業
8. 文久年間の小笠原島開拓における本草学の役割

はじめに

本草学はもともと自然のなかに薬物を探求することを目的に古代中国で成立し、医学と密接にかかわりながら発達した。その研究のなかから薬物とともに人々の生活に役立つべきものとして日常の食物、また飢饉に対処するための救荒食物を対象として、食物本草学や救荒本草学の分野が展開してくる。近世になって『本草綱目』がもたらされ、その研究をきっかけに日本にも独自の本草学が成立し、その展開のなかで享保期にはじまる産物政策は本草学に新しい分野である物産学を成立させた。物産学は薬物を主とするとはいえ、厚生利用を目的として農業や産業の分野と提携しつつ発展した。享保期の産物政策として諸国に産物帳の提出を命じ、採薬使を任命して諸国の産物を調査させ、見出された産物を幕府の薬園に栽培し普及させたこと、あるいは青木昆陽によるサツマイモの関東地方への普及¹⁾などはよく知られている。

こうして成立した物産学はますます発展した。それは幕府の医学館をはじめ各地で薬品会や物産会が盛行したことからも窺えよう。なかでも蝦夷・琉球や八丈島をふくむ伊豆諸島、そして小笠原諸島は輸入にたよらざるをえなかった薬品や産物の自生地、あるいは移植して栽培を期待できる地としてとくに注目されるようになる。

文久年間の小笠原島開拓は領土の所属をめぐってイギリス・アメリカとの複雑な外交

問題ともかわるが、この問題についてはいくつかの論考がある。本稿は文久年間の小笠原島開拓事業を幕末期の殖産興業策という観点に立ち、この事業にかかわった本草学者たちの事蹟を明らかにし、幕末期の本草学が果たした役割を考察するものである。

1. 小笠原島の発見と開拓前史

小笠原諸島は寛文10年(1670)、紀州から江戸に向かう蜜柑船が漂着したことによって発見された。この発見を知った幕府は島を開拓(新田開発)することにし、小笠原島の予備調査のため、延宝3年(1675)長崎から呼び寄せた島谷市左衛門²⁾を船頭として、唐船造五百石積の富国寿丸を派遣した。この調査隊は5月1日から6月5日の1カ月余小笠原に滞在して、島の地理や動植物などを調査し異草奇木を採集した。島谷は島を去るに当たって、鶏五羽(雄鳥三羽、雌鳥二羽)を放し、再度の渡島を期して父島に太神宮を建てて下田に帰港、幕府に調査結果を報告した。島谷の『島谷市左衛門無人島へ乗渡覚書』³⁾はこの調査行の記録である。島谷は小笠原諸島の概要と動植物について次のように報告している⁴⁾。

(前略)

- 一、五月朔日、湊之陸え上り、島之近辺方々見分仕、同三日江戸より持参仕候小船、陸に而取立、同十日出来仕候間、同十一日小船に而沖之島え出船仕、島廻り仕候。本島より南に当り大島見へ申候に付、同十五日本島南のはしより出船仕、同日七ツ時分、彼島え着船仕候。大概、あいた海路廿里程御座候様に覚候。
- 一、同十六日の朝より島廻り見申候得は、東の方何れも高山にて平地無御座候。湊に成可申所も無御座候。南西に廻り片湊壹御座候。此次入式町半程、口壹町半程、未申当り申候湊、深さ口七尋程、奥に式尋三尋。下は菊面石碇か、り悪敷御座候湊御座候。是は三日逗留仕、見分仕候得は奥の谷合に壹町に式町程平地御座候。又、脇に式町四方の平地御座候。右之流船之者共、此所に居申候様に奉存候。但、流川御座候得共、不断は流不申候。水は能水きれ不申候。此島之廻り、大形拾里程御座候様に奉存候。何れも谷々迄、大木小木大分生茂候。
- 一、同十九日、右之島出船仕、同暮六ツ時、本島南之端小島に能湊御座候間、是迄着船仕候。一夜留申候。
- 一、同廿日に小島出船仕、本島東の方廻り、風順悪敷相成候に付、小船に而本島出船並ひ御座候。島丑寅に当り御座候を見分仕、湊より此島迄之間、海路五町程之瀬戸西東に通御座候。本島向に当り能湊壹御座候。未申に向申候深さ八尋上の湊にて、此島廻り七里程御座候様に奉存候。別に湊は無御座候。
- 一、此島之次に間三町程之瀬戸御座候。廻り五里程に見申候。此島も右同断。
- 一、同日七ツ時分、右之島仕廻、本島湊え着船仕候。何れも右之島、大木小木生茂候。

見知り申たる木

- 一、桑の木 一、むくろうし 一、せんたん 一、榎木

右四色にて御座候。此外、木共大分御座候得共、見知りたる木無御座候。

御船え持参仕候木之覚

- | | | |
|-------------|-----|----------------------------|
| 一、山ひんろうし丸太 | 百本 | 長式間卷尺
本口三尺より式尺八寸五分式尺八寸迄 |
| 一、同丸太 | 五拾本 | 長卷丈
本口式尺五寸より式尺二三寸迄 |
| 一、桑の木 | 壹挺 | 長式間卷尺幅卷尺
厚サ九寸 |
| 一、同丸太 | 壹本 | 長式間卷尺 |
| 一、楠に似たる もく木 | 壹挺 | 長卷丈三尺平物
幅卷尺五寸厚サ卷尺 |
| 一、同木角 | 壹本 | 長式間卷尺厚サ九寸 |
| 一、もく本 | 壹本 | 是ハ名不知 |

御公儀え差上申物之覚

- 一、五位鷺に似申候鳥 壹番
惣の羽かは色。頭はし黒。但、頭に五六寸の白きれんしやく有。女鳥には、れんしやくなし。
- 一、ばんに似申たる鳥 壹羽
惣の毛黒。はし頭赤。むね腹り色。
- 一、いんこうに似申たる鳥 式番
惣の毛、日本のひよ鳥の如。胸頭赤。觜は、いんこうの如、ふとく御座候。
- 一、目白に似申たる鳥 五ツ
頭むね黄色。
- 一、かうむりに似たる鳥 壹番
面は狸の如。惣の毛、熊の毛の如。但、白毛交。足式ツ。爪五ツ宛、羽に爪
壹ツつゝあり。
- 一、鶉に似申たる鳥 壹ツ
- 一、山帰来
- 一、かつらの実 但、日本たちはきの葉に似申候
- 一、ひんろうしの実
- 一、同やしほの花
- 一、藤の葉如なる木の实
- 一、かつらの実 但、葉藤の葉のことく、とげあり
- 一、さいかちの実
- 一、山柿の実
- 一、やしほの実
- 一、宿砂の如なる木の实
- 一、楠に似申たる木の实
- 一、たら木に似たる物

一、浜はせをの実

一、むくろうし

一、子安貝

一、よめかさら

一、赤石

一、青石

一、菊面石

一、かちやんの木

一、名不知むく木

一、板椰子

一、楠に似たる もく木

一、やしほの葉

一、ひんろうし植木

一、やしほの植木

一、かちやんの木

一、宿砂に似たる木

一、朝兎

一、楠に似たるなへ木

ノ

一、沖之拾里廻り之島え宮立置申候。

一、本島拾五里廻り之島え右同断。

右之島勸請仕候御神

八幡大菩薩

天照大神宮

春日大明神

如此三社書付申候。 右之脇付、

大日本之内也。島々為見分、卯閏四月廿九日致着船。同六月五日に日本え出船。

伊豆下田に同十二日着船仕候。

延宝三年

卯五月吉日

右之通、書付置申候。以上。

一、かちやんの実

一、かきから

一、うに

一、明礬交縁礬

一、白石

一、海老

壺本 但、葉ともに切參候。

壺本 匂ひ有。長四尺程。

壺切 長三尺程。

壺切 長三尺。

壺本 一、浜椰子の葉 壺本

式本 長五尺。但、式鉢。

式本 長五尺。但、式鉢。

壺本 長七寸。

五本 但、なへ木。

壺本 葉丸し。花は日本の朝兎の如し。

壺本

御船頭并按針也

島谷市左衛門

同上乗

中尾庄左衛門

右市左衛門子

島谷太郎右衛門

大工江戸小畑町

八兵衛

卯六月廿日

無人島之覚

- 一、拾里廻り島 壱ツ 但、此間貳拾里有
一、拾五里廻り島 壱ツ 但、此間五町
一、七里廻り島 壱ツ 但、此間三町
一、五里廻り島 壱ツ
一、壹里貳里三里廻り島、四五ツ有。一町二町三町廻り島五拾程有。
但、伊豆下田より右島、辰巳に当り有。海路三百五拾里也。
一、伊豆下田 三拾五度 一、八丈 三拾三度半
一、北之無人島 貳拾七度半 一、南之無人島 貳拾七度
但、度一ツを四拾三里七合半積。
一、下田より新島 拾三里 一、新島より三宅島 七里
一、三宅島より三倉島 五里 一、三倉より八丈 四拾壹里
ノ六拾八里
一、八丈より北之無人島 貳百六拾里
一、八丈より南之無人島 貳百八拾四里
一、下田より無人島迄 三百五拾里有
無人島え渡り申道筋に右之島々段々有。
八丈より無人島は辰巳に当。八丈より無人島之間、小島五ツ有。
一、無人島に鶏五羽はなし置申候。内三羽雄鳥、二羽雌鳥也。

幕府は調査の結果、この島を「無人島⁶⁾」と命名した。幕府に献上された動植物は上覧の上、なぜか島谷市左衛門と船中之者共への褒賞として下げ渡された。島谷が離島に際して鶏を放したことに窺えるように、小笠原諸島開拓を念頭に調査に当たったにもかかわらず、幕府はこれらの採集品を小笠原島開拓に生かそうとは考えなかったようにみえる。この調査に用いられた富国寿丸も、延宝7年にはもはや無用として「かこひ船」にしてしまい、以後使用されないまま朽ちるにまかされてしまったのである。

享保・安永年間にも幕府による同島調査の企てはあったが、いずれも中止あるいは失敗に終わっている。寛政3年(1791)には、海防のための巡見に伴って幕府医官で本草学者田村元長(号西湖。田村元雄の男)は八丈島および小笠原諸島の巡見を命ぜられた。元長の巡見は薬草の調査を主としたものであったと思われる、小笠原島には至れなかったが八丈島の調査を実施している。田村元長はこの調査をもとに『豆州諸島物産図説』⁶⁾を著した。『伊豆七島風土細覽』⁷⁾(寛政12年自序)は三島勘左衛門が伊豆新島に10年間滞在した際の見聞をまとめたものであるが、その「三宅島」の記事に次のようにある。

此島土宜しき故にや薬種の産功能至て勝れり。天門、麦門、縮砂、防風、良姜、

蔓荊子、香附子、商陸、芦根、茅根、統斷、葶藶の類。先年寛政の始江戸表より田村元長といふ御典医巡検使として御渡海有し時、八島にて薬種の類を取らせ江戸表へ御持参ありて用試み給ひけるに、当島の薬草至て能ありとて其後も御用仰付らるゝ事度々也。竝び島にて神津は些劣り新島の産は一向無能なるよし聞ゆ、

元長は産物を調査しただけではなく、暖地産の薬草の苗や種を植え付けたのである⁸⁾。八丈島に植え付けられた薬種について、およそ50年後の天保11年『八丈島大概帳』に植え付け地とともに生育状況が記録されている⁹⁾。

天保十一庚子年八丈島大概帳云、

一 寛政三辛亥年田村玄長様御回島之節植附被成薬草、当時生立左之通。

大賀郷

一 肉桂 唐種二本

是ハ元五本之処三本ハ文政十丁亥年八月大風ニテ枯失。其節柑本兵五郎様御役所エ御申上候残テ二本ハ当時景気宜敷。

一 土茯苓 琉球種二株

是ハ追々早魃之時日腐ニ相成。柑本兵五郎様御役所御届申上。

一 草蓂 唐種五株

是ハ当時景気宜敷。

一 草荳蔻 唐種四株

是ハ風枯ニ相成ニ附、御届申上。

一 檳榔樹 一株

是ハ風枯仕処、追々新芽出、当時景気宜敷。

末吉村 下之沢

一 草荳蔻 唐種六株

一 草蓂 唐種五株

一 土茯苓 唐種五株

右三品相応ニ景気宜敷処、文政二己卯年夏早魃後枯失、当時無之。柑本様御役所エ御届申上。

末吉村上之沢エ実蒔九十八粒之内

一 肉桂十一本 唐種

右ハ元十一本之所、文政元戊寅年大風汐吹上、翌二己卯年追々枯失。杉庄兵衛様御役所エ御届申上。当時一本。

一 草蓂 唐種五株

一 草荳蔻 唐種五株

右二品ハ文政二己卯年夏早魃ニテ相痛、追々枯失。御役所エ御届申上。

櫻立村

一 肉桂 唐種二本

是ハ元十一本之処、追々風枯残テ書面之通。猶又文政十丁亥年八月大風一本枯失、当時一本。柑本様御役所エ御届申上。

右者、寛政三辛亥年、同五癸丑年兩度御植附御菓草木、当時枯残書面之通。

此外

龍眼樹 甘草 使君子 カンテイレキ シツカンラ樹 索厚朴之類、御植附之処、追々枯失少モ相残不申候。

寛政3年(1791)田村元長が八丈島に植え付けた菓草木のうち天保11年(1840)当時生育しているのは、大賀郷の肉桂(唐種)2本、草菓(唐種)五株、檳榔樹1株、末吉村上之沢に蒔種した肉桂(唐種)98粒のうち1本にすぎなかった。暴風や旱魃によるほか、植え付けられた菓草の栽培技術の不足が原因だったのではなからうか。

このように菓草をはじめとして、さまざまな産物の殖産のため本草学者が起用されるようになってゆく。天明6年(1786)には林子平が『三国通覧図説』を刊行して、海防の観点から小笠原諸島の重要性を説き、また同島の開発の利点を述べて処罰されたことはよく知られているとおりである。その後は、時に漂流船が漂着することがあり、帰着の漂流民からの事情聴取により島々に関する情報は蓄積されたが、定住する者はなく人々には無人島としてその名が知られるにすぎなかった。

2. 文久年間の小笠原島開拓事業の開始

文政10年(1827)、英国海軍の測量船ブロッサム号がこの島を測量し、主な島々に新たな地名を命名した上で、英国領と定める旨を刻んだ銅版を海岸の樹に固釘した。天保元年(1830)にはホノルルの英国領事の支援により、イギリス人・アメリカ人およびデンマーク人等5名が指揮者となってハワイ諸島から移民団が送り込まれ、父島に23名が定住することになった。このときの入植者の一人が後に日本の開拓使節との交渉にあたったアメリカ人、ネサネル・セイホレ(Nathaniel Savory, ナザニール・セボリー)である。その後も幾人かのイギリスおよびアメリカ鯨漁船の乗組員が住民に加わっている。

嘉永6年(1853)には米国艦隊総司令官ペリーは日本に向かう途中、小笠原島をアメリカ船の薪水補給所とするために父島に寄港、父島に土地を購入して石炭置き場を設置し、アメリカ海軍の軍籍を与えたセボリーに管理を任せた。その後、ペリーの命にしたがってプリマス号が小笠原を訪れ、母島を米国所領と定める銘を刻んだ銅版を樹に打ち付け、もう一枚を壺に入れて地中に埋めた。

横浜が開港されると小笠原諸島の領属が英・米・日本の間で問題とされるようになる。ここにいたって幕府は小笠原諸島の現状すら把握していない不備を補い、また海防に備えるため伊豆諸島とその沖にある小笠原諸島の現状調査に乗り出すことになったのである。幕府は、小笠原諸島は延宝3年の島谷市左衛門たち調査隊を派遣した事

実を以て日本に領属するとし、再び我が版図に入れる意図をもって移民を送り込み開拓することに決した。ここには英米両国との間に複雑な外交問題があり幕府はその対応に苦慮することになる。

こうした背景のもと、文久元年12月（1862年1月）外国奉行水野筑後守忠徳・目付服部帰一らによって小笠原島開拓が着手されることになったのである。幕府は文久元年9月19日、勘定奉行・外国奉行・軍艦奉行・目付にたいして次のように申し渡している¹⁰⁾。

覚

水野筑後守

伊豆国附島々御備向取調。且小笠原島御開拓之御用被 仰付候に付而は。都合次第御軍艦に乗組。彼地え罷越。巨細実檢致。厚勘弁之上。見込之趣可被申候。右之通相達候間。可被得其意候。

この申渡書をみる限り小笠原の帰属は大きな問題とはなっておらず、日本領であることを前提にした海防と開拓事業が主目的であった。

小笠原島調査隊は軍艦威臨丸に乗船し文久元年12月3日江戸を出帆、12月19日父島へ上陸(図1)。この時、父島在住の外国人はアメリカ人ネサネルセイホレおよびイギリス人ジョージホートン、トーマスエッチウヘブが統括する36人、家数19軒。母島にはイギリス人シユームシマウレがいた。居住の外国人たちに本島が日本領であることを宣し、約条を示

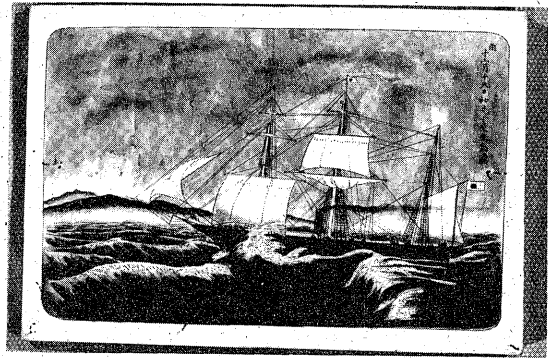


図1 「西十二月十九日初見小笠原島図」 宮本元道
『小笠原島真景図』坤 第21丁裏～第22丁表

しその厳守を約させて調査に取りかかった。周辺の測量、島内の地理や動植物・産物の調査を実施し、数名の役人（小花作之助を長官とし、益田、松浪、松本、林、堀）を残して帰港した。産物調査の結果、所在が確認され、あるいは推定されたものとして金銀類、甘蔗、芭蕉、株欄。その他、植物については「是迄見分不仕奇異草木のみにて、此度召連候小野荅庵も何分見分け兼候趣に付、是又篤と取調候は、良材も可有之」とある。

水野筑後守・服部帰一は文久2年3月、第1次予備調査を終えて帰府し復命書を提

出した¹¹⁾。

この復命書では、初めに小笠原の領属について触れている。かねてから小笠原には外国人が居住していることは知られていたため、この島の所属を確認することと、居住の外国人の処遇が問題だったのである。この問題は比較的簡単に解決された。

当時父島に在留した者の人数は36人、家数19軒であった。アメリカ人・ネサネルセイホレにこの度の開拓の趣旨を説明して意見を聞いたところ、かれらは「国命」を受けて、やって来たわけではないという。島の取り締まり役である米国人セイホレ、英国人ジョージホートン、同トーマスエッチウヘブにたいしてこの島は昔から日本領であることを説いたところ、かれらは以前から聞き知っていた様子で¹²⁾、それを承服し日本が規則を立てるなら遵守するという回答を得た。そこで早速、懐柔策として用意していた品々を日本政府からの下賜といって与えた。その上で、小笠原内部にのみ通用する為替相場を立て、土地については、これまで開墾した分については原則としてこれまでどおりとし、「全島取締方規則書」「港則」等を渡し、それに署名させた。母島でも同島在留の英人シユームシマウレにたいして同様に申渡し署名を得た。これで開発に当たって懸念された小笠原の領土問題は解決された。

ここで、小笠原の地理や地名、村名について報告し、本論たる開発からもたらされる利点について言及する。父島母島の他に人家は無いが、畑地にできそうな地所があること、海には鯨が豊富なこと、鉱物資源、植物資源について報告する。在住の外国人はサツマイモ、トウモロコシ、タロイモなどを植えて食糧に充てているが、米麦等も生育の可能性ありと報告している。

また、父島港湾は浦賀港や下田港よりは倍の広さがあり大船碇泊も可能であるとして、食料・石炭等を積廻しておき、渡来の外国船へ売渡したらどうかと進言。さらに鯨漁、鉱業、砂糖製造、木材の伐出し等によって、小笠原が潤うばかりでなく国の利益にもなるだろうと開発の利点を述べ、小野荅庵の調査にかかる「小笠原島草木取調申上候書付」(「草木押葉」帳を添付)、「小笠原島近海鯨漁之儀に付申上候書付」を提出したのである。

小野の調査報告は小笠原開拓に当たって物産政策に資するもので、「鯨漁之儀」は小笠原近海でのアメリカ船による鯨漁の盛んな事を述べ、我が国が捕鯨器械を持たないために手をつけかねた利を外国人に付与しているのは遺憾至極で、何とかして鯨漁を盛んにしたい。それについては越後の百姓平野廉蔵のような鯨漁稼方有志の者を募り、漁法はアメリカ人から習わせたらどうかと提言する。これには鯨漁稼方有志の者募集の「御触案」が添えられていた。この復命書の重点は小笠原の帰属問題よりも、小笠原の振興策にあったことが読み取れよう。

この予備調査にもとづき、幕府は文久2年4月軍艦朝陽丸を徴し、八丈島で募集した移民と開拓資材を送り込んだ。こうして本格的な小笠原島開拓事業が始まったのである¹³⁾。

3. 小野苓庵（職懋）による小笠原諸島の調査

上記の文久元年小笠原予備調査に派遣された本草学者の一人が小野苓庵^{もとよし}（職懋）¹⁴⁾である。水野筑後守から「先前見分被遣候もの共記録に、同島中薬草多く殊に人参は朝鮮産に劣り不申趣も相見へ候儀に付、産物学等心掛け相応医術出来候もの先当分小笠原島え差置候積を以、漢医蘭医各人つゝ、連越候は、右等之取調も行届、御国益にも罷成可申」と漢方医蘭方医各1名の派遣が要請され、漢方医および薬草その他産物の取調として小野苓庵が選ばれた。蘭方医については船中手狭で乗組の人数を減らざるを得ず、蕃書調所絵図調出役の宮本元道が「画学相応に出来」「且蘭医術之儀も少々は心得罷在候由」によって、絵図引兼務として派遣されることになった（西十月、水野筑後守「伊豆国附島々其外え召連候医師之儀に付、申上候書付」）。こうして、小野苓庵と宮本元道が小笠原島に派遣され、医療に従事しながら同島の産物調査に当たったのである。

小野苓庵は幕命により外国奉行水野筑後守に従って文久元年12月19日小笠原島に上陸し、同2年3月9日父島を離れるまでの八十余日間、小笠原諸島に滞在して島内の動植物を調査した。調査を終えて帰着した苓庵の報告書は文久2年4月4日水野筑後守・服部帰一を通して大和守に提出された¹⁵⁾。

小笠原島草木取調申上候書付

水野筑後守

服部 帰一

私共小笠原島御開拓為御用罷越候に付、小野苓庵え為取調同島草木押葉に仕、別冊二本差上申候。依之此段申上候。以上。

戌四月

提出された「小笠原島草木取調申上候書付」は所在不明だが、苓庵の小笠原島でのフィールドノートと考えられる『小笠原島物産録』が残る¹⁶⁾。（図2）

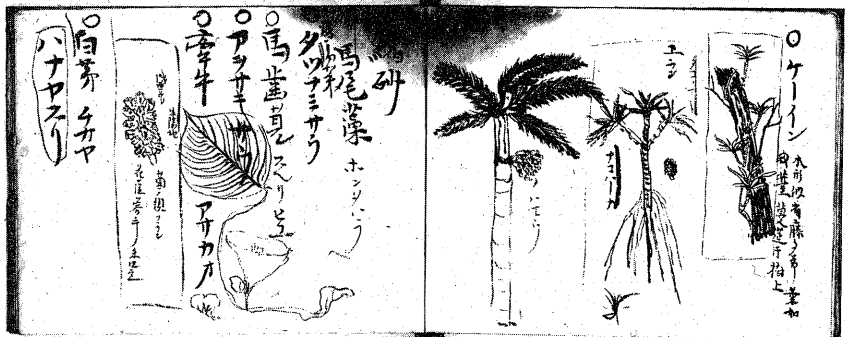


図2 小野職懋『小笠原島物産録』 武田科学振興財団杏雨書屋所蔵 第8丁裏～第9丁表

本書の内容は原則として漢名を見出しに、その下に和名、小笠原島での方言（英語か）を記す。説明文の付されるものは少なく、ほとんどが1行に1種の記述である。なかには図の付されるものもあるが、これらの多くは名称が未詳のものである。本書の形態が横本であること、全体に加除の跡が多いことを考え合わせると、おそらく本書は小笠原島における茶庵のフィールドノートで、本書をもとに報告書がまとめられたと推定する。一例として、本書の初めの部分（第1丁表～第2丁表）を紹介する。

- 桔梗ラン 蝶々草
- 蒟醬 キンマ
- 無患子 ムクノキ（「ノキ」は加筆） ○スモールフレイフ
楸木（墨で抹消）
- 苦棟（「苦」は墨で抹消） センタン ○ゼーザ
- 指甲花 ハマモッコク ○ワイチ」ポーテ
- タコノキ（「タコノキ」を「ユスノキ」に訂正） 蚊母樹ノ類 ○ワイテ」ヲ、ル（「ワイテ」ヲ、ル」の傍に「ゴースベレイス」を加筆）
- ヲニハシリ 芫花一種 此地、別ヲニハシリト名者アリ 白ハ別物（「白ハ別物」は墨で抹消）
- アスヒクサ（薄墨で加筆）
- 両面ラン
- 抄羅 ヘコ華夷考
- 狗脊 リウヒンタイ
- モクノキ 一名モクベンケイ ○ベシー」フレース（「フレー」を見消ちで「フレ」に訂正）
深山カシ 田村龍眼一種大葉者 ロースウン
- イソクルミ ○マーレ、杏
此木多海浜ニアリ。実形胡桃ト異リ、然モ碎テ之ヲ味時ハ胡桃ト異ナシ。故之レヲ名。
- 天仙果 イヌヒハ ○スパイス」ヲード
- 葉三ヤナキ 楊ノ属 ○実名メリ、イン」ナーツ、木名タンマンナ
漢名未詳（「葉三ヤナキ」を縦で抹消し、傍に「イキル」と加筆）
- 無花果 イチ、ク ○ペーイケ
- 石皿 一種 セツタカツラ ○ダール」ホー
- 同一種（薄墨で加筆） テウシカツラ
- 大蓼 ムマノハコボレ
- 苦菘（見消ちで「職」に訂正） 一種大葉者 ○グース」パレイ
- 龍葵 イヌハウスキ ○ポーローロー
- アヲタケラン 漢名不祥 ポツークウイン
イソニカナ
- 龍珠 ハタカハウスキ
- 杜仲一種 大葉小葉ノ二種（「品」に訂正）、○ライマント

○ニシキツタ

○扶芳藤 ツルマサキ (「扶芳藤 ツルマサキ」を縦線で抹消した上、傍に「イキル」と加筆) ○アイヤン

○エンサナ 形似毛連菜無毛茸者 漢名不定(ママ)

○酸漿草 スツハクサ

○羅望子 ワニクチマメ ○マンブン」ウチド

琉球ヒルカホ

○牽牛 一種野草者 葉形似杜衡者 アフヒアサカオ ○フロブ

(「野草者」は抹消。「琉球ヒルカホ」の「ホ」は「オ」の訂正。「アフヒアサカオ」は縦線で抹消)

本書には次のような文案がある。

今般小笠原島為御用罷越候処、御国益に相成候葉草木多分無之。此地は至て暖地にて椰樹草撥之類自生有之、四時共に落葉致候事無之趣異人申聞候間、御植附に相成候て後々御国益筋に相成候葉草木、心得候分名前相誌差出申候。(第12丁裏)

これは植物類の記述とわずかに記録される魚介・鉱物類との間に書かれており、報告書の下書きである。後述する正式の復命書にはこの文章に手を加えたものが付されている。小笠原島は亜熱帯性の植物が自生しており樹木の落葉を見ることがないほどの暖地であるとして、繁殖をはかれば国益となるべき植物の名前を報告した(後に紹介する「御植付相成候葉草木目録」)のである。

別冊としてこの報告書に添えられたのが『小笠原島草木押葉』¹⁷⁾である。第1冊巻末には次の識語がある(原漢文)。

小笠原島ハ八丈ノ東南百里外ニ在リ。其ノ地太暖ニシテ四時アルコトナシ。是ヲ以テ、草木ノ状、多ク内地所産ノモノニ異ル。唯ダ内地ニ異ナルノミナラズ、亦タ内地ニ無キ所ノモノ有リ。辛酉十二月(平出)命ニ因リ、外国奉行水野筑後守ニ従ヒ其地ニ到リ、滞留スルコト八十余日。偏ニ山谷ヲ跋渉ス。亦タ奇草異木アレバ、則チ其葉ヲ採リ、コレヲ腊シテ一百八十余品ヲ得。即チ、一々其実ヲ質シテ以テ其名ヲ標シ、或ハ諸夷人ニ訊ネ以テ夷名ヲ質ス。夷人ノ知ラザル所ノモノハ、以テ後ノ識者ヲ俟ツ。但シ、艦中颯温ニシテ又夕屢波濤ノ侵ス所ノ為メ颯壞スルモノ既ニ多キヲ憾トス。今、僅ニ七十六品ヲ存ス。乃チ装貼シテ二本トナス。コノ後、其地ニ到ル者、能ク其ノ不足ヲ補ハバ則チ可ナリ。

文久二年壬戌五月 小野職懋謹識 [白文方印]

小野苓庵は小笠原諸島で採集した珍しい植物の葉を持ち帰ったのである。船内に持ち込んだ葉は180余品だったが、艦内の高温と海波の飛沫をかぶったために多くが傷ん

でしまい、76品だけが残った。無事持ち帰ることのできた腊葉がこの押し葉帳に貼付されたのである。腊葉の脇に記される品名は島の外国人住民に質問して得たものであるという。以下に収録される品名を列挙する（通し番号は筆者）。

1. 指甲花 海浜所生/ハマモツコク 2. アップルツリイ 島名 3. 紫珠 ヤブムラサキ 4. 椋木 一種 5. 天仙果 イヌビワ 6. 芥 ジバリ 7. ホラシノブ 大葉者 8. 檉槐属 9. 水蠟 樹一種 10. マーレ、島名 11. 同 12. 山梔子 クチナシ 13. ハナテウジ 14. 草撥 属 カーバイ 島名 15. ヨジシダ 16. ニシキツタ 17. トベラモツコク 18. 未詳 19. ヤブダモ 20. アスヒクサ 21. 未詳 22. ヲニシダ 23. 琉球アサカホ 24. 同 25. タゴノキ 26. 未詳 27. イワマスケ 28. 山礫樹 陰地生者 カンボク 29. エンザナ 30. 杜茎山一種 シマセンリヤウ 31. 未詳 32. 杜仲一種 マサキ 33. トベラモツコク 小葉者 34. ユノキ 35. アカメユス 36. タンマンナ 島名（以上、第1冊）。

1. 龍珠 イヌホウツキ 2. 縮砂 薬舗呼為伊豆縮砂者 3. イソスオウ 4. モクノキ 5. □□□ノヲ 島名 6. ナヲバーナ 同 7. コマノキ 8. 蚊母樹 ヒヨソノキ 9. ネヂスゲ 10. ベ、ガラーシ 11. 雞腸菜一種 タツナミサウ 12. 蔓荊子 ハマゴウ 13. イヤロー ウヲード 島名 14. 抜葵 サルトリイバラ 15. ハスノハキリ ビンビン 島名 16. 指甲花 陰 地生者 ハマモツコク 17. 未詳 18. 龍葵 ハダカホウツキ 19. 草零陵香 ハギクサ 20. ハマ ナデシコ 21. ワイルウエード 22. 同 23. 費菜 矮生者 ヒメキリン 24. 未詳 25. 莞 花類 26. 莞花一種 円葉者 27. 食茱萸 カラスノサンシヤウ 28. 無患子 ムクロジ 29. ツ ボクサ 30. アホサギサウ 31. イソニガナ ボックウキン 島名 32. 糙葉樹 ムクエ ノキ 33. 蒟醬 キンマ 34. 石長生 ヌリバシサウ 35. 石血 テウジカツラ 36. イワモモ 37. 蒟藟 ソクズ 38. 小石積 テンノムメ 39. 胡頹子 グミ 40. 黄董 キケマン 41. 樟 クス 42. スワセパークス 島名 43. フサラン（以上、第2冊）。

また、小野は帰着後、3度に分けて小笠原での採集品を幕府に献上している¹⁸⁾。

咸臨丸帰船之上、左之品々献上ニ成ル。

- | | | | |
|-------------|---------|-------------------|----|
| 一 ベコ | 貳本 | 一 キヤベツ | 壹本 |
| 一 バーム | 壹本 | 一 海岸石 | 壹ツ |
| 一 ハイナップルス実 | | 一 ラウワラ実 蘭名ワートルホーム | |
| 一 鉱石類 | | 一 カランフシヤール貝 礮礪 | |
| 一 南島製魚齒ノコギリ | | 一 石台植苗木 | 五種 |
| ヘゴ キヤベツ バーム | ハイナップルス | ラウワラ | |
- 右之通、差上申候、以上。

戌四月

- | | | | |
|-------|----|-------|----|
| 一 菊名石 | 三ツ | 一 株柶 | 壹本 |
| 一 野芭蕉 | 壹本 | 一 火打石 | 壹ツ |

右之通、四月廿四日上ル。

一 蘭銘石 拾七 一 株栢 壹本

右之通、四月廿六日上ル。

苓庵はこれら腊葉帳と採集品のほか、翌5月になって滞在中に父島に植え付けた草木、および今後植え付けるべき植物の目録を提出した。これは文久2年6月12日付で、水野筑後守・服部婦一の連名で上申された¹⁹⁾。

小野苓庵ヨリ差出候小笠原島植付品取調書之義ニ付申上候書付 水野筑後守
服部 婦一
今般私共之差添小笠原島之被差遣候小野苓庵より、彼地植付品、別紙之通取調差出候間、一覽仕候処、書面之趣可然相聞候に付、其俣差上申候。依之、別紙式通相添、此段申上候。以上

戊五月

覚

書面草木類御植付相成候様可被取計候事。

別紙

奉申上候覚

寄合医師

蕙畝惣領

小野苓庵

私儀、今般小笠原島之為御用罷越候処、御国益筋に相成候薬草木等、多分は無之候得共、元来至而暖地に而四時共に格別氣候之変旋無之趣、在留之異人共申聞候間、御植付に相成、後々御国益筋に可相成薬草木并雑木類、別紙目録に相認差上申候。以上。

戊五月

小野苓庵

御植付相成候薬草木目録

楨榔 官桂 巴豆 龍眼 丁香 縮砂 藿香 麻黄 木香 黄耆
杜仲 胡椒 甘草 草菓 白豆冠 肉豆冠 呉茱萸 延胡索 土茯苓
蘇朶 省藤

右之外、橘類竹類御植付相成候様奉存候。以上。

五月

小野苓庵

苓庵は「御国益筋ニ相成候薬草木等、多分は無之候得共」と断りながら、ここにみられるような薬種を中心とした植物21品を植え付けたほか、「後に御国益筋に可相成薬草木并雑木類」として橘類や竹類を植え付けたらどうかと提言している。この提言は後に小笠原島に派遣された阿部櫛斎たちの植え付け品目に生かされる。

4. 宮本元道による記録

宮本元道²⁰⁾は絵図引き兼蘭方医師として派遣され、小笠原島の記録を残した。宮本元道（文政8年(1824)～?)は戸田采女正家来（大垣藩士）。安政6年10月から蕃書調所絵図調出役として出仕した。絵図引き兼蘭方医師として派遣された元道は、小野菴庵とともに咸臨丸での小笠原島予備調査に携わり、菴庵と共に帰ってきている。元道が派遣されるにいたった経緯は以下の史料に詳しい²¹⁾。

伊豆国附島々其外え被差遣候に付、召連候医師并絵図引之儀相伺候書付
水野筑後守
服部 帰一
戸田采女正家来
宗伴養子
蕃書調所絵図調出役
宮本元道

此度伊豆国附島々其外え被差遣候に付、漢蘭医師兩人召連罷越度旨、最前筑後守より相伺置候処、船中手狭に付乗組人数致減少候に付而は蘭家之方は書面元道儀画学相応に出来、殊に同人相願候趣、大久保越中守古賀謹一郎申上、且蘭医術之儀も少々は心得罷在候由に付、絵図引旁右之もの連越候様可仕、漢家医師之方は医業は勿論本草学出来候もの召連、彼地菓草其外取調も為仕候間、元道之方は大久保越中守古賀謹一郎え被仰渡可被下候。依之同人共申上候書面返上、此段奉伺候。以上

酉十一月

元道の本務は絵図記録係であったから、小笠原諸島を絵図として記録した²²⁾。父宗伴によって書き留められた元道の小笠原諸島での見聞が『宮本宗伴無人島紀行』²³⁾である。本書の内題は「無人島行略記 文久元年辛酉十二月水野筑後守殿=附添発船、二年壬戌三月帰府」で、内題の前に「大垣藩宮本宗伴男元道無人島え罷越、先達而帰国説話 父宗伴書記之写し」とされている。巻末には、「無人島ノ産ノ図」としてタコノ木、ワニグチモダマ、名称不詳木の3種の図がある。本書には咸臨丸での慣れぬ航海の苦勞のほか、小笠原島へ上陸してからの様子が簡潔に記されている。産物に関する記述は以下の如し。

(父島の)産物はサツマイモ第一、カウライギビ、芋之類。海族は沢山。其中シヤガクボ、第一之食料。鶏も相応に養置候処、日本人百余人上陸、追々買尽す。雞島に野羊大分繁殖之由。草木はスユロ之類。已松竹杉無之。シユロ、大なる者、二抱十五間も有之。椰子も有之。鳳梨も有之。龍眼も少々有之。砂糖、自然生之者、中の竹の如し。

(母島の)産物、父島に同じ。此処、豕野ニ繁茂し。牙あつて猪之如し。犬をかけ鎗にて刺す。鯨か浜と名付、鯨沢山浅水え来り、モリにて捕ること易し。両島共、蝙蝠大さ三尺許、沢山に居。已に一疋生ながら持帰り、献上に相成候。(中略)朝兎、蕃椒、数年不枯盛々之趣、桑も冬を経て葉不落。母島はコウラヒキビ、二月六尺位に繁茂。両島共、山水瀧も有之。水に塩氣有之。井水は火脉に近きか、暖なり。

5. 栗田万次郎と井口栄春

小野苓庵、宮本元道に次いで派遣されたのが栗田万次郎²⁴⁾と井口栄春²⁵⁾である。この二名はさきに咸臨丸隘狭のため乗り組み員を極力減らさなければならず、見送られていたのである。和泉岸和田藩主岡部筑前守長皓の侍医・井口栄春については下記の書き付けが残る²⁶⁾。

岡部筑前守医師

井口栄春

右は今般小笠原島御開拓に付、同島へ医師差置度候処、相応之者も無之候間、尚御船御仕出し之砌、被差遣候様仕度心得之処、書面栄春儀は先般筑後守召連れ咸臨丸御船へ為乗組可申積にて、右御船手狭にて難為乗組、朝陽丸御船へ為乗組罷越候儀に御座候。然る処、同人義医術も相応に出来、人物も宜敷候間、当分小笠原島へ差置候段、在島支配向之者より申越し候。依之此段申上候。以上。

戊四月

水野筑後守

大久保越中守

服部 帰一

この文書には「外国掛大目付、御目付 承之」、「一覽仕候 戊四月 御勘定奉行/同吟味役」とあり、この申し出は承認された。

栗田万次郎については、下記の書き付けがある²⁷⁾。

伯耆守様御家来栗田万次郎儀御履被(平出)仰付、伊豆国附島々并小笠原島へ為御用、外国御奉行水野筑後守様・御目付服部帰一様被成御越候節被差遣候間、其段可申渡旨、昨夕御家来之者被召呼被仰渡候処、伯耆守様御在坂中に付、御承知之上、御礼之義如何被成御心得可然御座候哉、各様迄御内慮相伺、大坂表へ申上度、此段奉伺候。以上。

(文久元年)十一月廿三日

松平伯耆守様御家来

沢村又七郎

この結果、伯耆守松平宗秀は栗田万次郎の小笠原島派遣を承諾し、文久元年12月には小笠原に派遣される筈だった。

こうして井口栄春と栗田万次郎の両名は、文久元年12月予備調査に派遣される予定であったが、咸臨丸が手狭なために次の便船を待って待機していたのである。両名は上記のごとき経緯から文久2年2月朝陽丸に乗船、3月17日小笠原島に到着した。

栗田万次郎は3月17日以来小笠原島にあって産物調査に当たっていたが、およそ3ヵ月後、次のような帰府願を提出し6月15日平野船に乗船して帰府してしまった。その願書には次のような小笠原島の草木調査についての報告書が付されていた²⁸⁾。

口上覚

栗田万次郎

私儀、当三月着島以来別紙之通草木類其外共取調候処、当島中御国益相成候程之品類絶而無之義と奉存候。就而は私儀、過分之御手当等頂戴仕、さしたる目当も無之、便々御用中之積に而る島罷在候義、何共奉恐入候。尤、当島之義は御内地と違ひ気候多暖に而る春夏之二候而已之地方に御座候間、二三ヶ月も在留罷在候得は大略相分申候。此上在留仕如何様取調候共、別段発見之品柄も無之義と奉存候。右に付、向後便船次第早々帰府被仰付候様仕度奉存候。依之此段奉願候。以上。

戌六月

小笠原島草木其外之義に付申上候書付

栗田万次郎

私儀、当三月着島以来小笠原島所産之草木類段々取調候処、延宝度并ペルリ日本紀行に有之候檳榔、白檀、西国米、蘇木、其他御有益相成候程之木草は絶而無之。且又、金石類取調は未熟に御座候得共、大略相考候処、是亦御利用に相立候品類も無之様奉存候。既に咸臨丸御船御乗組之中、大略草木金石類御探索も有之候由に候得共、猶又為念精々当島に而已所産致し、御内地に無之草木は匠業仕置申候。其外御内地同様之分并同種に而る少々相異り候分は別紙相認奉入御覧候。此上、草木金石類段々推考仕候処、御国益相成候程之品物は絶而無之様奉存候。依之此段奉申上候。以上。

戌六月

覚書

異産之分

○椰樹 ○ベンパーム 即野芭蕉 ○蒲葵 ^{カヘチ} ○ラハロー即タコノ木 ○トmana木 ○マ
リー木 ○ハウ木 即ハマキリ ○アツリンウード ^{バインアツプル} ○鳳梨 ○浜なた豆 ○シ
ユカキーン タコノ木ノ蔓性ノモノ ○ウリ ^ベ 木 母島ニ多シ ○杪羅 ^{ボシス} ○檸檬 ^{レモン}
橙 ^{レツトルウン} ○ハマ枸杞

此外不審もの五種

和産に少しく異り候分

○タロ ○甘薯 ○番椒 ○葱^{フニファン} ○大蒜 ○南瓜 ○ハマヒルガホ ○玉蜀黍
 ○トベラ ○文株蘭^{ハマツモト} ○ウバメカシ ○短生龍葵 ○蘇大葉白華 ○良薑^{クマクケラン} 壹種
 ○山梔子 ○柘^{ヤマクワ} ○天瓜 ○大葉酸草^{グーゾヘレン} ○甘蔗 ○杜荖山^{イブセンリョー} ○土萆藤^{フトーカツラ} ○西
 瓜 ○胡瓜 ○甜瓜 ○ハクラン ○シダ ○芭蕉 ○無花菓 ○タマラン ○
 キ、ヨーラン ○木櫛子樹 ○白英

和産に同き分

○菜 ○大根^{ハマカウ} ○酸漿草^{コイテマク} ○チ、草 ○薺 ○チトリ草 ○烟草 ○馬齒莧 ○
 ツルナ ○蔓荊 ○天仙果^{シヤケツイバラ} ○雲 実 ○松葉蘭 ○ナキラン ○劔子股 ○
 野シバ ○山スゲ ○天竺桂^{ヤブニツクイ} ○苦棟^{センダン} ○水蠟樹^{エホクノキ} ○黄槿 ○冬葵 ○椿一種^{キクラギ}
 ○ムクエノ木 ○ハナヤスリ ○冬青 ○羊蹄 ○ソクツ ○木耳 ○馬鈴薯
 ○糊麻眼 ○蚊母木 ○菝葜 ○ナンバンキセル ○荅^{スモートリクサ} ○柯樹^{カン} ○杜仲一
 種 ○モツコク ○紫菜荊^{ムシロイハ} ○アシタ ○榎 ○岩ヒバ

動類之部

○野羊 ○猫 ○田犬 ○大蝙蝠 ○豚 ○伏翼^{カウモリ} ○水鼠 ○鹿 ○鼠^{ハツカネツミ} 貘 ○
 鳴 ○雁 ○白鷺 ○鶯 ○白頭鳥 ○鷄 ○大ルリ鳥 ○千鳥 ○洋鴨 ○鷹 ○
 未審之小鳥 母島に居てメシロに似て頬翼端黒色なり ○アベ 鷺 鷺に似て背毛黒褐色能く海中に入
 て能く魚を捕ふ

右之通り御座候。

栗田が帰府を願った理由は、小笠原は「二三ヶ月も在留罷在候得は大略相分申候。此上在留仕如何様取調候共、別段発見之品柄も無之義と奉存候」というものであった。3カ月にわたる小笠原産物の調査の結果、有益な草木は絶無であり、鉱物類についても未熟につき確たることはいえないが利用できそうなものは無いと断じている。すでに咸臨丸乗組員(小野荅庵のことだろう)が、大略草木金石類を御探索済みと聞いているが、念のため「当島に而已所産致し御内地に無之草木」は「庄業」にして差し上げるとい(この押し葉の所在は不明である)。このほか、上引のように植物と動物に分けて、植物についてはさらに「異産之分」「和産に少しく異り候分」「和産に同き分」として報告した。この目録を検討してもやはり国益となるべきものはないと報告した

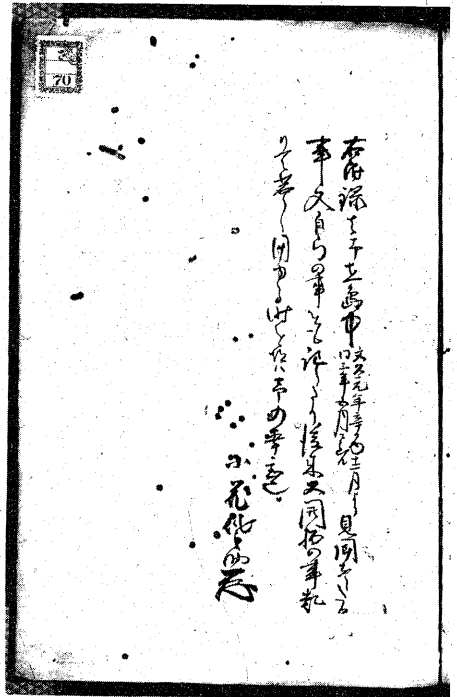


図3 小花作之助『小笠原島風土略記』
 巻末識語(註56参照)

のである。

小花作之助は『小笠原島風土略記』(図3)で栗田の報告を「全島固有の草木類、内地と異動」として引用した上で、「其茎幹の形を岡部筑前守の医師にて一時渡島せし井口栄春といふもの図写して持渡れり。委敷は此者に因て草木の形状花実を問ふへし」²⁹⁾としている。残念ながら栄春の調査記録および写生図³⁰⁾の所在は不明で、その内容も知られない。

この予備調査にもとづき翌文久2年6月軍艦朝陽丸を徴し、八丈島で募集した移民と開拓資材を送り込んだ。こうして本格的な小笠原島開拓事業が始まるのである。

父島に役人が居住し、いよいよ八丈島より移民団を移住させる準備が整ったが、初めから島に医師を詰めさせることは予定どおりにいかなかった。第一次予備調査には艦船が狭いため予定どおりの医師を連れて行けず、その後、朝陽丸で渡航してきた栗田万次郎は願いを出して早々帰国してしまったし、井口栄春は最初から暫時の権宜(兼官)としての派遣であったので、船便があり次第、交代の者を派遣する必要があった。井口栄春の交代として採用されたのが阿部櫟齋である。櫟齋が採用された理由は「年配も有之、療治功者且本草等をも深く相心得、医学館鑑定御用をも相勤居候者に付」と、医療経験と、とりわけ本草学に精通していたことにある。櫟齋には本草学者としての役割が期待されたのである。水野筑後守・服部帰一はさらに、「病氣之儀は季候地脈に関係」するので、小笠原島のように「赤道に偏り候土地おるて療養方修業仕候は、医学相ひらけ候一端にも可相成」として、櫟齋のほかには西洋医学所から両三輩を移民の治療と修業を兼ねて派遣することを要請し、西洋医学所の伊藤長春院・林洞海にその人選を依頼したが、これは実現しなかった。

6. 阿部櫟齋と天保8年の無人島(小笠原島)渡航計画

阿部櫟齋³¹⁾は享保期の採薬使阿部将翁照任を曾祖父にもち、その子孫であることを常に強く意識しており、小笠原についても殖産政策に寄与すべく早くから注目していた。天保10年(1839)に起ったいわゆる蛮社の獄に際して、櫟齋は無人島渡航計画に関係して取り調べをうけている。無人島渡航計画とは常州鳥栖村の無量寿寺住職順宜・順道父子が許可も得ず無人島に渡航して、同島に寄港する異国船を通じて外国の事情を探索しようと企て、同意の者を集めて種々相談におよんだというものである。参画者は順宜の江戸で常宿としていた公事宿山口屋彦兵衛(金次郎)、元徒士齋藤次郎兵衛、水戸領内郷士大内五右衛門(清右衛門)、印籠時絵師山崎金三郎(秀三郎)らで、使番松平伊勢守、田原藩士渡辺華山も関与した形跡があるというものであった。無人島渡海計画は首唱者順宜の供述書によれば、次のようなものであった³²⁾。

(前略) 無人島には奇石異草多く有之趣承伝、両三年以前より存立、右島へ渡海

之上木材奇石異草等取候は、格別利徳に可相成と一函に存込候得共、不容易義且地理等も不弁、折々寺用に付出府の節々、蘭学者又は山師に出会、存意申述べ候、同意の者追々出来候。

南町奉行筒井伊賀守が櫟齋と花井虎一に尋問したなかに次の記事がある³³⁾。友進は櫟齋、虎一は花井虎一、尹は尋問者筒井伊賀守のことである。

(前略)次に友進に向けて曰く、其方蘭学医者なる歟。曰く、左に候。初は某に従学し、後に幡崎鼎に従ひ、漸く通読に止り、翻訳等出来ず。尤も平生本草は好み居候。尹問て曰く、去る酉年春、其方宅にて無人島の咄致たるよし、如何。曰く、然り。毎月三日の日拙宅会日なり。尹曰く、所謂物産会歟。曰く、然り。月日は失念したれども、会集の節胡椒を植ゆる話ありしゆへ、私の説には、日本にては八丈島歟、又は西に近く琉球など風土宜敷からんと述たる時、虎一は八丈より先き二百里に無人島あり。極暑の地にて、胡椒に宜しき事疑なしと、喋々弁論したり³⁴⁾。此時金次郎、秀三郎等も居合、其説を承りたる事相違なし。尹虎一に向けて曰く、左に候哉。答て曰く、私実に話はしたれども、発言は私にあらざ、他の人なり。友進曰く、右秀三郎、金次郎の兩人は、面あたり虎一より聴きたる者なれば、何よりの証人、御尋あらば分明ならん。

この事件で、櫟齋は次のように「押込」を申し渡された。事件の真相理解のため、花井虎一への申渡しも掲げておく³⁵⁾。

高家

今川上総介家来

医師

阿部友進

其方儀、花井虎一・金次郎より物産之儀を談候より無人島話に移り、開発致し候は、御益にも相成、先祖阿部友之進家名再興之為にも可相成と存、渡海致し度段、彼是咄合候儀有之、右は願相濟候上之心得に而密々渡海等可致心得には無之候へ共、金次郎儀無人島之絵図持參候節、出所も不取調同人頼に任せ写し遣し、又は御普請役大塚清右衛門兄大塚庵金子に差支候間、所持之鉄炮其外相頼、金子調達致呉候様申聞、町人に而鉄炮質に取、又は所持致し候儀は難成処、金次郎へ相頼、金子滞候節は相流し候対談に而金子借請遣候段、不埒に付押込申付る

御小人頭

柳田勝太郎組

御納戸口番

花井虎一

其方儀、去々酉年十月頃高家今川上総介家来医師阿部友進方へ參候節、金次郎に出会知人に相成、無人島渡海之咄致し、友進も罷越薬草植付方等致し度旨申聞、同志之者に候処、其段は勿論、同人名前も不申立罷在、渡海之儀願立に不及、船等之手当出来次第出帆いたし度旨、斎藤次郎兵衛申聞候を雑談と存候御承り置、友進順宜は願濟之上に無之候而は難成心得にて、金次郎秀三郎心底は一定不致候処、同様申合候旨申立、無人島に異国船懸り居候哉、渡海中漂流致し外国へ参り候哉、浦賀洋中に而諸国廻船之妨致し候而は差支候由、又は金花山之辺へ異国船罷在、右見物出来候趣は金次郎秀三郎渡辺登等□聞候旨申立、右は何れも推考迄之雑談に可有之候へ共、不輕儀に候処、其事之実否乱方も不致聞捨置、今般に至り治定之趣に申立、其上金次郎より絵図取戻に差越、又は次郎兵衛儀五月節句後順宜方へ参り直談致し候由に付、船手当出来次第出帆可致、左候は、順宜より順道へ申通し、金次郎秀三郎も一同之申合に有之と推量致し、五月六月は渡海時節に付出帆可致、大内五右衛門と順宜同志に而所持之船に武器糧米等を入、渡海之用意致罷在候旨相違之儀申立、探索之為とは申、最初より其筋へも不申立、右体不届之儀相企候者共と出会對話致し、又は願も不致秀三郎一同旅行致し候始末、軽くも御扶持被下候者之身分に有之間敷儀不届に付、重追放可申付処、發起以前及密訴候に付、身分は是迄之通居置御仕置有怨申付る。(下線は筆者)

このころ櫛齋は自宅で「毎月三日の日」を会日とする物産研究会を催していた。「去る酉年春」すなわち天保8年春の櫛齋宅での物産会で、胡椒の話が出た。その時、櫛齋は「日本にては八丈島歟、又は西に近く琉球など風土宜敷からん」と述べた。これにたいして花井虎一は「八丈より先き二百里に無人島あり。極暑の地にて、胡椒に宜しき事疑なしと、喋々弁論した」という。金次郎、秀三郎もこの場に居合せ、其説を聞いていたという。順宜は「無人島には奇石異草多く有之趣承伝」え、渡島の上それらによって大儲けを企み、寺用で出府の節々「蘭学者又は山師に出会」い、計画を話すうちに追々賛同者ができていったと述べていた。無人島に奇木異草が多いことはそれまで無人島漂流から帰還した者たちからの情報が蓄積されており、こうした情報がかれらの間に伝わるまでになっていたのである。順宜は渡航計画にあたり江戸の識者の力を借りようとした。その識者の中に櫛齋がいたのである。このような事情であっても一味と関係をもったため、櫛齋は上記の罪状によって罰せられたのであった。

しかし、櫛齋自身この計画にかなり積極的な様子で、単に巻き添えになったというわけでもなさそうである。虎一への申渡しに「友進も(無人島へ)罷越薬草植付方等致し度旨申聞」とあり、櫛齋への申渡しには「無人島話に移り、開発致し候は、御益にも相成、先祖阿部友之進家名再興之為にも可相成と存、渡海致し度段、彼は咄合候儀有之」とあった。ただ、「友進順宜は願濟之上に無之候而は難成心得にて」とあり、この無人島渡海計画を願い出て許可を受けた上で実行するつもりであったという。事実、順宜は水戸藩に無人島渡海の内願書を提出したが「公儀にて思召も有之島故、水戸殿より申立は難相成」と却下され、公儀に願書を出すべく奔走中であった。この点

で賛同者の間には不一致がみられ、金次郎と秀三郎が5月6日に渡海する予定で船を用意し、武器糧米等運び入れて出帆の準備にかかっていたところを、花井虎一の密告によって暴露してしまったのであった。この事件は鳥居耀蔵による政治疑獄事件で、花井虎一はその手先として無人島渡海計画一味に紛れ込んで事情を探ったうえで密告したと考えられている³⁶⁾。なお、櫟齋への申渡し書で、櫟齋の身分が「高家今川上総介家来医師 阿部友進」とあるのは櫟齋に関する新事実として注目される。なお、天保13年に刊行された東條琴台著『増訂 伊豆七島全図』³⁷⁾で、櫟齋は門人として校定にあたっている。「押込」に遭っているにもかかわらず、櫟齋の伊豆七島と小笠原島への志は続いていたものとみえる。

櫟齋は筒井伊賀守の尋問にたいして「先祖阿部友之進家名再興之為にも可相成と存、渡海致し度」と答えている。櫟齋は曾祖父将翁を誇らしく慕い、無人島開拓を成功させることによって、先祖阿部照任（将翁・友之進）以来の本草学者としての家名を再興したいとの願いは櫟齋の本心であったろう。櫟齋が先人将翁をいかに誇り、その学を継承したいと願ったかは、『又新堂隨筆』³⁸⁾の扉裏に「予幸に祖翁之遺業を奉し先君之教に頼り負担之勤勞を免かれ、旆を負て御国に耕し、花を植へ芳を養ふて身を立て名を掲げ土宇広開く」と書き、また幾つかの著書に「将翁四世之孫阿部喜任」と署名し、あるいは「将翁四世之孫」の印を用いていることから知られよう³⁹⁾。

天保8年春の櫟齋宅での物産会で胡椒の話が出た時、櫟齋は「日本にては八丈島歟、又は西に近く琉球など風土宜敷からん」と小笠原島と同様、琉球にも目を向けていた。櫟齋は蝦夷にも注目しており、安政3年には『蝦夷行程記』⁴⁰⁾（版心には「北海道中記」と刷られる）巻上下2冊を刊行している。本書の櫟齋序にいう、

この行程記は、家祖照任の三使採薬行記を規本として、北海隨筆、北夷考証、野作雜記、遭厄日本紀事、奉使紀行、夷談俗語、東夷窃々夜話、赤夷風説考、休明光記、辺要分界図考、銅柱餘禄、蝦夷志、弘の蝦夷路程便覧、鈴木益堂の蝦夷田間、高橋氏の地球全図、藤田惇齋の蝦夷圍境全図等によりて、纂録せるものにして、所謂文豹一斑なり。予もまた異日普くこの地を経渉し、其天度を測量して、舛誤を糾正せんことを冀ふと爾云

本書は「家祖照任の三使採薬行記（『採薬使記』のことか）を規本として」、関連諸書を参考にしながら編集したものであった。校正には松浦武四郎があたっている。櫟齋自身は蝦夷に行った経験がなかったが³⁷⁾、いつかは蝦夷を調査することを願って本書を編集したと思われる⁴¹⁾。

7. 阿部櫟齋の小笠原島調査と殖産事業

かねてから曾祖父の本草学の業績を継ぎ家名再興を願い、無人島（小笠原島）や琉

球・蝦夷に注目してきた櫛齋にとって、この度の小笠原開拓の事業はまさに願ってもない機会であった。

阿部櫛齋の小笠原島派遣医師採用伺い（文久2年5月）は次のようなものであった⁴²⁾。

小笠原島え差遣候医師之儀に付相伺候書付

水野筑後守
服部 帰一

町医師
阿部将翁

小笠原島御開拓相成役々其外相詰候に付、医師差置可申処、最初筑後守帰一同船罷越候者は無拠次第も有之差置兼、其後朝陽丸え乗組罷越候岡部筑前守医師井口栄春事は御雇被仰付候得共、暫時権宜之取計に而、船便次第何れにも当地より交代之者早々可差遣候積御座候処、書面将翁儀は年配も有之、療治功者且本草等をも深く相心得、医学館鑑定御用をも相勤居候者に付⁴³⁾、今般御雇被仰付、支配向一同一ヶ年交代之積を以差遣候様仕度奉存候。一体同島御開拓方に付而は追々申上候通、鯨漁稼は勿論、土地潤沢繁栄いたし、入港之外船餘計相成候様御手續御座候より外無之候間、石炭置場御取設、欠乏品御売渡方等、夫は見込之趣は申上候通御座候。乍去、猶勸弁仕候処、同所は太平洋中之一孤島に而東は三乙島、西はピリピアン諸島之中間に相当り、右洋中航海仕候船々病人等有之、右等島々迄里程相隔り居候節は無拠同所え差置候事と相見、當時在留罷在候もの之内、ネサネルセイホレを除候外は悉く各国軍艦鯨漁船等之水夫に而病氣養生のため上陸いたし、其俣居付候ものに有之、一体久敷船中に罷在候節は空気流通不宜、自然病氣を生し候ものに而、殊に鯨漁船等は本土を去り候而幾年となく海上に漂泊いたし居候職業にも御座候間、尤御病人も出来安可有之に付、医師御遣し相成居候得は詰合役々移民共、手当のみに無之、各国船舶乗組のもの病氣養生のため上陸相願候者迄、療養相叶候事と相成候は、随而入港之船舶も数多に相成、土地繁栄之基可相成は勿論、同所御開拓御手初に外国人御惠養之御趣意一統に相いたき候は、兼而同所之儀に付、領属之訳柄等彼是申出候英国に而も右等同仁之御惠愛に感服仕、別段異論等も有之間敷哉、将病氣之儀は季候地脉に關係仕候事有之、同所之如く赤道に偏り候土地おみて療養方修業仕候は、医学相ひらけ候一端にも可相成、旁以右様御手續相成候方可然哉奉存候。右可然被思召候は、前書将翁之外、猶西洋医学所より而三輩修業旁被差遣候様仕度、其段戸塚静海大槻俊齋え被仰渡、人物被調申上候様仕度奉存候。依之此段奉伺候以上

戌五月

こうして阿部櫛齋は井口栄春の後任として採用され、幕府軍艦朝陽丸に乗り組み文久2年6月18日江戸の練練所を出帆した。江戸出港から翌文久3年5月11日横浜へ帰

着するまでの間の経緯は櫟齋の日記『豆嶋行記』⁴⁴⁾に詳しい。

朝陽丸は出港まもなく、浦賀に停泊した。麻疹の流行のため、乗組員のなかにも麻疹に罹る者が出たためである。出港待ちの6月20日の日記には、海がひどく荒れれば「植物ハ海上へ投スルノ勢ナリ」と教えられ、そんなことになるのならば「八丈へ陸上ケシテ、植ル方便ナリ」と書き付けている。実際、八丈島に植え付けられた植物も多くあった。21日には幕府の楓山文庫から借用してきた『東印度草木図説』（プリユメ著述、1835年、2冊）を取り出して勉強している。29日には小笠原から帰府途中の幕府の雇船「平野廉蔵鯨獵船上乗ニテ、藤本順助入来。栗田万二郎ニ合シ」と前任者の栗田万次郎と会っている。30日には「小笠原島ノ芭蕉ノ実ヲ食フ」の記事がみえる。これは同日の日記に「藤本潤助、万二郎入来」とあるから、栗田か藤本から入手したものであろう。7月2日「万二郎、蘭書ヲ書抜ク」とあり、栗田万次郎が蘭書の書き抜きをしている様子もみえる。出港待ちの間は、7日「由比ト田辺トへ建白ト家書ヲ出ス」、10日「江戸薬品ノ儀ニ付、仕立飛脚ヲ出ス金五両渡ス」、13日「建白ヲ草ス」など小笠原行の準備多忙ながらも、まだ落ち着いた様子がみえる。7月20日浦賀出帆。同21日には八丈島に着岸、上陸し大賀郷御陣屋に到着。櫟齋の八丈島での活動は帰国後の「褒美願」で次のように記される⁴⁵⁾。

右之者儀、去夏支配調役田中廉太郎八丈島に而移民出稼人相撰小笠原島え連渡候節召連罷越候処、其頃麻疹并暴瀉病流行之折柄、別段骨折医療いたし、且八丈島に一月月逗留中、元来医師無之土地に付、年来煩居候諸病療治願出候もの夫々施薬いたし遣し、其後小笠原島え相渡（下略）

医師として当時流行していた麻疹の治療に、あるいは島民の「年来煩居候諸病」の治療にあたった。菊池作次郎の控『小笠原島御開拓に付御用私用留』⁴⁶⁾には一行の浦賀出帆から八丈島を発つまでの動向が書き留められている。浦賀でははしかが流行しており乗組員のなかにもこれに罹る者が多く、およそ1カ月の間出帆を見合わせたのである。八丈島でも同様の流行病の治療のため、ここでも1カ月ほど出帆を見合わせた。この間、櫟齋は治療に多忙であった。

八丈島では流行病の治療に忙殺されるなか、上陸するとすぐに島の自然についての観察を行っている。その観察記録は『八丈本草』⁴⁷⁾として残る。本書には八丈島の植物14種が薬効とともに記録される。『八丈本草』の内容は以下である。（振り仮名は適宜略した）

あまくさ 延喜式 甘草⁴⁸⁾ 神農本草経に出る。上品の薬なり。味甘く、性平かにして毒なし。五臓六腑の邪気寒熱を去る。中を温める。毒をげし、血脉を通し、咳漱をとむ。

文久二年戊の六月廿三日に大賀郷の御陣屋、二根を植付たり。後年、必ず有用をなすに至らん。

うけら 万葉集 をけら 和名抄

朮、上品の薬なり。味甘く温にして毒なし。風寒湿気を去り、食物を消化し、霍乱、吐下止まざるによし。

いのくち ふしだか

やふしらみ 江戸 牛膝

本経上品の薬なり。味ひ苦く酸く毒なし。手足のしびれ、ひきつるに妙なり。血氣を追ひ、婦人の月水を通す。

はまぼたん ぼたんにんじん 防葵 本経上品

味辛く、甘みあり。苦く毒なし。疝氣によし。欬逆を治し、小腹の支満をいやす。葉の嫩きとき、煮て食ふべし。

たつのひげ りうのひげ 麦門冬 本経上品

味甘、性平にして毒なし。羸瘦たるをいやすべし。短氣、口の乾くを止め、陰分を強くす。根に生ずる玉をとり、乾かして薬とす。

おほはこのみ 車前子

実をとり薬とす。味甘く塩く、性寒にして毒なし。小便を通し、陰分をつよくす。目の赤きをいやす。

葉及根、味甘く、性かんにして毒なし。はなぢ、下血をいやす。婦人の難産を治すべし。妊娠のもの、葉を採り、ゆひきて食ふべし。

やまついも やまのいも 薯蕷

根をとり、乾かして薬とす。中を補い氣力をまし、腰の痛をとむ。陰分を強くす。煩熱を除く。

とくざらん 石斛

葉と茎をとりて薬とす。味ひ甘く、性平かにして毒なし。痺をいやし、五臓を補ふ。胃の氣を平かにす。脚膝の痺痛むによし。

いはひば いわまつ 菴柏

葉をとり薬とす。味ひ辛く甘く、性温にして毒なし。婦人、陰中のひへ、又は熱ありて痛によし。血閉くして子なきをいやす。淋病によし。

ていかづら 絡石

葉と茎を採りて薬とす。味甘く、温にして毒なし。風熱にて口の乾き、喉舌の腫れ飲食のできざるをいやすべし。筋骨をかたくす。關節を利して痛まざらしむ。

なかれんば 春のくまたけらん 江戸 杜若

根をとり薬とす。葉、くまたけらんの如くにして、花白きを異なりとす。味辛く、性温にして毒なし。頭痛をいやす。眩倒、目の痛むによし。胸中のきやくきを下す。

れんば くまたけらん 高良薑

根をとり薬とす。味辛く苦く、性熱にして毒なし。胃中の冷氣をいやすべし。霍乱、腹痛を治し、痢病に用ひよし。風氣をやぶり痺と足の弱をいやすべし。

【ひとつば】 ^{せきい}石草

葉を採り薬とす。味ひ苦く甘く、平^{ママ}からにして毒なし。熱を去り、小便を通す。
つかれを補^{おきな}い、腎水をます。

【へびゑいた】 もゝちどり 黄芹

毒あり。口中にいるゝべからず。茎葉をもみて、疥癬、白禿、せにタムシ等へ
すり付へし。癒すべし。

上陸の翌朝には早速、草木の覆薦をとり、御陣屋へ草木類2樽を植付けた。『八丈本草』にも甘草の条下に「文久二年戊の六月廿三日に大賀郷の御陣屋、二根を植付たり。後年、必ず有用をなすに至らん」とあり、このとき植え付けられた草木の中に甘草があったことが確認できる。他に植え付けられた草木は不明である。

八丈島にあった1か月間に櫛齋は島の自然や百姓たちの生活や風俗を熱心に観察して記録している。

8月6日には「日々樹芸ノ者ニ培養ス。ヨク根付タリ」とみえ、植え付けた草木が順調に育っている様子がわかる。ときには次のような歌を書き留めている。

みるも聞も驚かれぬる事のみ

かはらぬものは秋せみのこえ

朝陽丸にたいして小笠原へ出帆の命が出たのは8月10日である。櫛齋は出帆準備中にも島民たちの治療に多忙であった。11日には「灸點除之。式百三拾式人」。12日には「末吉村中ノ郷榎立村へ行。月夜カヘル。末吉村ニテ病者七十一人ヲ診察ス」と記録している。

朝陽丸が八丈島で男15人、女15人、大工5人、木挽1人、鍛冶職1人、船大工1人の計38名の移民団を乗船させ、小笠原島に向けて出港したのは文久2年8月21日である。櫛齋は出港する前日に次のような句を詠んでいる（『出放題集』⁴⁹⁾(図4)）。

八月廿日の朝にかん(感)する事ありて

朝なさな いのる神々御仏も 身にも妻子もさはりなきがに

櫛齋の祈りが通じたのか、乗組員一同が驚くほど穏やかな海で順調な航海であった。小笠原島に到着したのは8月26日。櫛齋の荷物は「御用樹木五ツ樽。リウキウ包四ツ。大箱一ツ。ヤナギゴリ二ツ。メ七ツ。御用品、自分トモ両様ニテ十二品」であった。櫛齋の到着によって、交代の医師を待っていた井口栄春はこの朝陽丸に乗船して閏8月15日小笠原島を発船、帰国した。

文久3年正月9日には中浜万次郎を乗せた平野船が小笠原に到着。平野船は中浜万次郎の指導によって捕鯨に従事することになるが、捕鯨については略す。

荷物の「御用樹木五ツ樽」のことをいうのだろう、櫛齋は浦賀を出港したとき、次

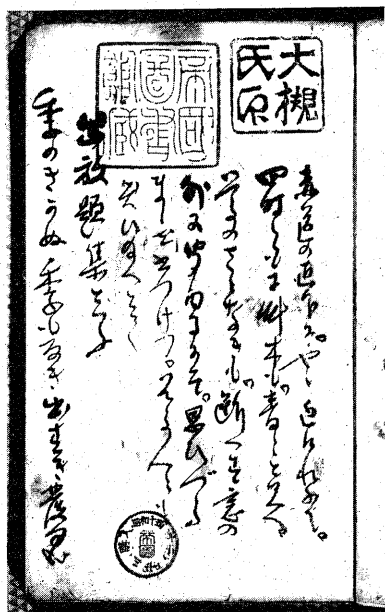
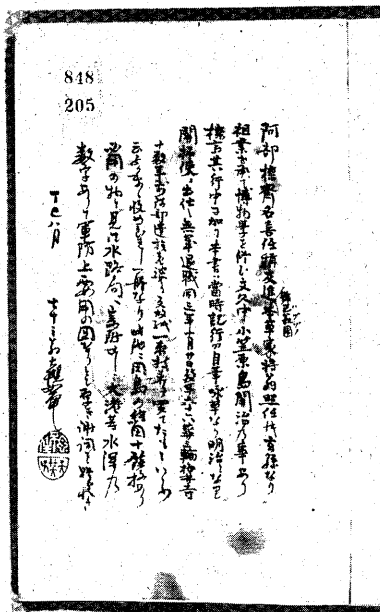


図4 阿部揆齋『出放題集』
第1丁表(註49参照)



同 卷末識語

のような草木を積み込んでいた⁵⁰⁾。竹類や蜜柑類は前任者小野茶庵の提言を採用したのであろう。これらは巢鴨の植木屋、長兵衛⁵¹⁾と卯之吉から購入したものであった。

戌八月阿部将翁渡来之節持越植付候草木類左之通(朱筆)

一 本蜜柑	九本	一 雲州蜜柑	九本
一 九年母	九本	一 養老梅	九本
一 あんず	九本	一 夏/秋 桃	九本
一 前司/百目 柿	九本	一 紅/白 寸桃	九本
一 梨子	九本	一 大実林檎	九本
一 大実柘榴	九本	一 葡萄	九本
一 金柑	三本	一 真竹江南竹	九本
一 胡麻竹	壹株	一 亀甲竹	壹本
一 使君子	三本	一 東京肉桂	七本
一 橄欖	貳本	一 蒲桃	三本
一 東京肉桂	貳本	一 龍眼肉	貳本
一 漢種縮紗	貳株	一 黄耆	貳株

一 木香	式株	一 甘草	式株
一 漢種杜仲	式本	一 土茯苓	式株
一 生省藤	式株	一 呉茶萸	式本
一 延胡索	式株	一 銀合歡	式本
一 金合歡	式本	一 巴豆	壹本
一 肉豆蔻	壹本		

右之通持越植付ル。但、巢鴨植木屋長兵衛卯之吉方ヨリ買上候趣ニ有之。
 追而持越シ候積ニテ注文いたし置候品左之通（朱筆）

一 松苗	千本	一 杉苗	千本
一 椴木	式百本	一 檜木	五百本
一 ツガ	式百本		

右仕立候手当代金壹両

右之通奉請取候

巢鴨町植木屋 長兵衛 印
 同 卯之吉 印

8月27日小笠原の父島へ上陸。植木などは一盆も枯れず無事であった。ただ、閏8月20日の日記には「只恨、荔枝・龍眼・肉豆蔻、御艦中アヤマチテ水夫塩水ヲカケ、此三種ヲ失ヒタリ。再渡ノ時、又植芸セント思フ」と書き留めているので、これらは小笠原へ向かう船の中で枯れたことになる。

父島に到着した一行に田中廉太郎が指示した13カ条のなかに次のような箇条がある⁵²⁾（他の5カ条は略す）。

- 一、阿部将翁相心得候植物類之内、果物生熟之上、外国人へも御払に相成候様致度候事。
 - 一、芭蕉布、其外相応之織物出来候様致度候事。
 - 一、植付候薩摩芋等より焼酎を取候様致度候事。
 - 一、食塩製方出来候様致度候事。
 - 一、正覚坊之甲よろしき処取集め、江戸廻之事。
 - 一、油に可絞品、穿鑿之事。
 - 一、魚油絞方之事。
 - 一、女子共閑居之暇無之様、相応之手業工風之事。
- 但、芭蕉布に可織糸製し方等之儀は、子供之仕事にも可相成哉と存候事。

これらの指示は樺齋の任務に関わる。果物ができた場合は外国人へも与えること、芭蕉布あるいは相応の織物を織る工夫をすること、植え付けたサツマイモ等より焼酎を取れるようにすること、食塩の製法を工夫すること、正覚坊（亀の一種）の甲羅の上質なものを取集めて江戸に廻送すること、油を絞れる品を探すこと、魚油の絞り方

を工夫すること、女や子供が手持ち無沙汰で遊んでいることのないように相応な手仕事を工夫すること等であった。在島中の櫛齋は医療および産物調査と殖産振興のため、これらの任務をも果たすべく奮闘したのである。

櫛齋は上陸の翌日8月28日には早速、井口とともに薬園の作業に取りかかっている。この井口は帰りの船便を待っていた前任者井口栄春である（栄春は閏8月15日離島）。29日には「初テ袋沢採薬。（中略）種々奇品。印度地方トモ存候山形、地味、一驚ヲ喫了致候」と内地との風土気候、草木の違いに驚く。閏8月朔日、「草ヲ杉田ニ渡ス」。3日には母島へ行き、「薬種、種々植付。又、草木ヲ植込、江戸へ送了」と母島でも持参の草木を植え付けるとともに、母島で採集した草木を植え込みにして江戸へ送っている。*同月4日には植え付けた草木の生育を願って、定役の翠庵益田鷹之助は次のような詩を作っている。

身體精然老有神 憐君後苑竹梅湮
今年培養波寧地 明歳遍看百花春

翠庵

月日不明ながら、櫛齋も『出放題集』に次のように植え付けた草木が順調に育っている様子を喜んでいる。

台命にて己れの持渡り艸木松竹も皆根つきしや、竹も笋を出し、松もみとりをふきけり。松さえみとりをいたす程なれば、暖国に移したる薬品類は悉く根つき、時ならぬ花を咲けり。

色かへぬところか松の若みとり
こゝまでも恵とゞいて仏手柑
秋艸の仲間入りせよサツマ芋

閏8月4日、櫛齋は幕府に「リンナウス、六百薬品、ワートル」を買上げてもらうよう願書を出した。リンナウスはリンネの分類法による西洋博物書、六百薬品は西洋薬物書の一つでオスカンプ(D. L. Oskamp)著“*Afbeeldingen der Artseny-gewassen met derzelver nederduitsche en latnsche beschryvingen*”全6巻(1796~1800年刊)のことで、安政5年山本錫夫が図譜の部分を模写して『和蘭六百薬品図』7冊(国会くせー19)を成した。ワートルは『窠篤児薬性論』⁵³⁾である。小笠原での物産調査に、これらの西洋の博物学書や薬物学書を参考にしようとしたのである。

織物の工夫をみる。文久2年8月19日小笠原へ向かう途次、寄港した八丈島で「土人ニ染料ヲ問フ。○黄ハカリヤスニテ染、アトヘ灰汁ヲ焼ト云。コノカリヤス、コバナクサ也。／○トビ色 マダミノ皮ニテ染メ、其煎ガラヲ灰汁トナシ、カケレバトビイロトナルトイフ」と、土地の者から染料について聞き取り調査を行なっている。小笠原での織物への準備であった。閏8月6日父島で「右納、島カラムシノ皮」を採取。

これは布を織るための材料である。翌文久3年正月五日には「小袖羽織ノ右納織、カラムシ織ヲ猷白ス」。同6日「苦棟ノ板ヲ晒ス。布ノ織立ヲ建白ス。右納布、トキハ、カラムシ、右二種之儀、イハニ織方申付ル」。移民の女、岩に織物の指導をして試織させたのである。7日には山に登り「カスカリラノ如キ木」の皮を採っているが、これは織布の材料であろうか。10日「右納、カラムシノ皮ヲ剥取ル」と糸を採る準備がなされ、4月15日になって「今日ヨリ糸、岩、両女右納織ニ取カハル」。同19日「織物出来ニ付、請取。両人え御手当被下候」。こうして、移民の女糸と岩の二人による右納織⁵⁴⁾が成功したのである。

食塩製造。文久2年8月2日の日記に「御用状出ル。土人ニ塩ノ焼方并塩浜ノ事ヲ計ル」とある。この御用状はこれに続く「塩の焼き方并塩浜ノ事」を指示したものか確証はないが、八丈での製塩法を聞き取ったのである。文久3年正月8日になって「食塩製造儀、建白」とある。樺齋みずから製塩法を工夫し、その実現のための方策を提出した。翌9日には「扇浦の西淀川寄りに塩焼小屋取を建て」、同10日「塩焼小屋見廻り」と食塩製造も軌道に乗ろうとしている。日記からはどの程度の成果を収めたか判然としないが、おそらく成功したのであろう。

4月27日の日記に「夜中、願書⁵⁵⁾ヲ草ス」とある。翌28日には「願書ヲ差出ス。薬品仕入ノ為、一ト先帰府。社仰。荷物即日取仕舞」とあるので、樺齋には外交にともなう事情を知らされていなかったとみえ、一次的な帰府のつもりだったようである。樺齋が小笠原を出港したのは文久3年5月1日であった。

生麦事件の解決を苦慮するなか、小笠原島の開拓事業は中止の止む無きに至り、文久3年5月13日すべての役人および移民団は朝陽丸に乗船して小笠原を引きあげた。ここに文久年間の小笠原島開拓事業は中断したのである。こうして樺齋も開拓事業の道半ばにして離島を余儀なくされたのである。

文久3年5月、小花作之助が小笠原島を去る時のこととして書き残した記録のなかに次の記事があり、樺齋が植え付けた草木類の生育状況がわかる⁵⁶⁾。

一 文久二戌年秋八月渡島せし医師阿部将翁といへるもの持渡りて、翌亥年夏の頃迄培養せし菓草木の内、金銀合歡、巴豆の類、暫時に繁茂して花実をなせし、我此島を去るに当て、向來島の益ならんものは此菓草木故、保護繁殖をつとむへしと島夷に命して出けり。其品種左之通、

東京肉桂 生育ス	式本	龍眼肉 是ハ八丈島え植付、不持越 ⁵⁷⁾	
漢種縮紗 生育ス	式株	黄 蓍	式株
生 省 藤 生育ス	式株	甘 草	式株
木 香	式株	延 胡 索	式株
土 伏 苓 生育ス	式株	漢種杜中 生育ス	式株
肉 豆 冠 生育ス	壹本	呉 茱 萸 生育	式本
金 合 歡 繁茂	式本	銀 合 歡 繁茂	式本

巴 豆 繁茂	壹本	橄 欖 繁茂	貳本
使 君 子 生育	三本	本 蜜 柑	九本
雲州蜜柑 生育	九本	九 年 母 生育	九本
養 老 梅 枯ル	九本	あ ん ず	九本
夏/秋 桃 生育	九本	前司/百目 柿 枯ル	九本
紅/白 す 桃 枯ル	九本	梨 子 枯ル	九本
大実林檎	九本	大実石榴 半生	九本
葡 萄 枯ル	九本	金 柑 生育	三本
真竹江南竹	九本	胡 麻 竹 生育	壹株
亀 甲 竹 生育	壹株	蒲 桃 枯	三本
孟 宗 竹 生育	壹株		

右之外、数品の野菜類の種もの持渡るといへとも、良農なく耕耘培養をつとめす。向來、追々經驗して其巧を得は重宝なるものも多かるへけれど、いまた其暇あらずして此地を去しは遺憾少からざるへし。

これによって、櫟齋が小笠原に移植した草木と「繁茂」「生育ス」「半生」「枯ル」の注記からその生育状況が判明する。持渡った草木は食用、薬用および生活資材に資するものであった。後便で送るはずだった「松苗千本、杉苗千本、椴木二百本、檜木五百本、ツガ二百本」は到着しなかったのか、小花のリストには含まれていない。

また、明治11年の植物栄枯報告⁵⁸⁾のなかに「文久年度移植品」の項目があり、「日本種林檎 一本栄/石榴 同/九年母 二本栄/トヨシ 栄/銀合歡 三本栄/金合歡 一本栄/椰子大樹 同/竹 二株」とある。追記に「右ノ外各種ノ花草木共霜雪ヲ得テ花心ヲ成シ春暖ヲ待テ花ヲ生スルモノハ凡テ季候ニ適セス。文久年間桜梅桃ノ類試験セシニ然リ」とある。

櫟齋が手掛けた事業は在島1年余にして実を結び始めていた。櫟齋は小笠原を去って3年あまり後の慶応2年(1866)の著書『又新堂隨筆』に、小笠原について「この島は土の性質もよく水の流れもありて、十分に諸産物の培養すへきの地なり。(中略)常に再渡して樹芸せん事を思ふ」と小笠原で事業の中断を悔やみ、再渡の希望を述べている⁵⁹⁾。

(前略) 予や小笠原島にありし時、人家を見るに異人は皆、蒲葵和名あちまきの葉をとりて屋根も覆ひ、又四方をもかこへり。八丈移民の家を作るにも、いにしへのさまおもひいてられ、柱は掘こみて建て、其うへに、はりをわたし、夫に其末と末に穴をうがちちきてふもの、古へのさまになし、又まれに横木を渡し屋根も四方も悉くあちまきの葉以てせり。この島は土の性質もよく水の流れもありて、十分に諸産物の培養すへきの地なり。

○この島に來りて、樹木密箐の処に至るに、人の手の入らずして樹木の自然に生

するを見るに、大樹も一虎口ひとにぎり或は杖の如きも皆直立にして、竹の林に入るが如し。海岸の樹は怒濤に根を洗あらわれ、風に吹たをさるゝ処に、この如くにはあらず。予この地にありし時に山に崩して道を作り、又家を造る為に岡を平かにせし時に、地の性質を考るに赤殖の江戸にいふおちやまと唱ふる赤土の粘り強く渋き土なり。この土の上に樹葉根の土に化したるか八九寸ハ、あり。西洋人の百年にして一尺の土を生ずといふかこれなるや。又山の崖下に真土の砂まじりになりたる処もあり。常に再渡して樹芸せん事を思ふ。

櫟齋は1年余の小笠原諸島滞在を終えた。帰国の後の「褒美願」(前引の続き)によって、櫟齋の小笠原島での功績をみておこう。

(前略) 其後小笠原島へ相渡在勤役々移民出稼人等不快之節は勿論、在島外国人病気迄も薬用手当仕、其上兼而本草学本業之ものに付、南島に無之樹木持渡候分培養手当仕新規織物試造之儀も同人相心得世話いたし、追々御益可相成基本心掛一ケ年之間不自由艱苦不相厭精勤仕候に付、水野下総守一団被遣候寄合御医師蕙畝忽領小野茶庵も為御褒美美金貳枚時服二ツ被下候間、将翁儀身分も違右見合には相成兼候得共、事実におゐて勤功艱苦は茶庵よりも相増居候儀に付、右相当之御褒美被下置候様仕度奉存候、依之此段奉願候以上

亥六月

医療活動は八丈島からの移民はもちろん、外国人住民にたいしても違和感なく行なっている様子は日記から読み取れる。産物調査については「兼而本草学本業之ものに付、南島に無之樹木持渡候分培養手当仕、新規織物試造之儀も同人相心得世話いたし、追々御益可相成基本心掛」と櫟齋の本業が本草学にあることをいい、この分野の活動が期待されていたことが読み取れよう。小笠原諸島に自生しない草木の移植とその培養をおこなった。「新規織物試造」とは田中廉太郎の指示を受けたもので、すでに述べたように少なくとも試し織りは成功していた。

小笠原から帰った後の櫟齋は洋書調所(文久3年8月開成所と改称)に登用されたようである。「開成所人名録元治二年六月十五日改」の「物産学世話心得」⁶⁰⁾には、長田宗十郎・田中仙永とともに阿部友之進の名がみえる。この時の物産学教授出役は伊藤圭介の後任、田中芳男であった。宮本元道も絵図調出役として継続勤務している。

8. 文久年間の小笠原島開拓における本草学の役割

——阿部櫟齋『南嶼産物志』を中心に——

これまで阿部櫟齋の小笠原での足跡をたどってきた。ここで、『南嶼産物志』⁶¹⁾をとおして櫟齋の本草学のあり方をみておきたい。

『南嶼産物志』は小笠原での樫斎の調査記録である。扉に「閏月十五日稿」とある。樫斎の小笠原滞在は文久2年8月27日から文久3年5月1日であったから、この閏月は文久2年閏8月か、その後の閏月がある慶応元年丑年(1865)閏5月のどちらである。本文中(ツルエイランの記事)には「予、閏月廿六日ニ袋沢ニ行ク道ニテ、数十本ヲ見ル」とあり、また欄外に「戌ノ九月十五日・戌ノ九月七日・戌ノ七月十九日」の朱筆もみえる。このほか閏8月より後の観察によるものも多いから、扉にある「閏月十五日稿」は文久2年ではなく慶応元年閏5月15日でなければならない。以上から、本書は樫斎が小笠原から戻った後の慶応元年にフィールドノートをまとめて成ったものであると考えられる。しかし、本書は貼紙による訂正や加筆が多くみられ未定稿というべきものである。おそらく、本書をもとにした浄書本があったと推測されるが、現存しないようである。

本書の見返しには「木部 分目」として以下の35品が記される。「アヂマサ・キアダン・ツルロワラ・サゴノ木・シマナシ・テリ葉ノキ・小葉テリハ・ハスバノキ・ハマホ・ノキ・チ・ノミ五種・クチナシ二品・デク・カラエ桐・シヤリンバイ 長葉、円葉、赤ハダ・山ピランジ・シマホウノキ 四品・花ガシ・ヤママユミ・島ユツリ葉・ニカヂサ二品・アカウラ・薄葉マサキ・特生天ノムメ・白ムク」。しかし、本文には「アヂマサ・木アタン・ツルエイラン・サボイノキ・蕊木・シマナシ・テリハノキ・小葉テリハノキ・ハスノハギリ・ノグルミ・チ・ノミ・クチナシ・母島クチナシ・デク・シマヤツテ・シヤリンバイ・アカメノキ・ヤマピランシユ・島ホウノキ・ハナガシ・ヤママユミ・シマユツリハ・ニカチサノキ・赤ウラカシ・マサキ・特生天ノムメ・サルトリノ花・キン九年ボ・シマミカン・青ハゼ・フクラシバ・シマトウギ・ヤマカバシ・キアラセイ・岩谷カツラ・サワガシ・イタビカツラ・キンマノキ・センダン・ヘゴアチマサ」の40品が収められる。アヂマサから特生天ノムメまでの品名に異同があるのは、「分目」には見出しに採用した品名ではなく本文中に列挙された品名のうちから樫斎の案を採用したことによる。特生天ノムメより後の記載の増減は、樫斎が慶応元年閏5月以降に手を入れたことによる。その際に白ムクが削除され、サルトリノ花からヘゴアチマサの14品が増補されたと考えられる。

樫斎の日記『豆嶼行記』⁶²⁾には、この他にも多くの動植物の観察記事がある。本書『南嶼産物志』の扉に「木部」とあったように、本書は木本類に関する記録にすぎない。本書の他に「草部」や「魚部」「獣部」などがあったのではないかと考えられる。

記載内容は名称、形状、採集地、利用法などで、樫斎自身の考察が加えられる。多くは、記事の後に余白が残されており、浄書本にはそれぞれの図が附される予定だったと思われる。岩谷カツラの記事に「図ヲ見テ知ルヘシ」とされている。品名には複数が充てられる。これは小笠原のような亜熱帯性の植物に通じていなかったため、人によって異なる植物に比定する結果となったのである。当時の本草学では動植物に現在のように標準和名がなかったから、同じものが地方や時代によりさまざまな名称で呼ばれ、別々のものが同一の名称でよばれることも少なくなかった。名称と実物との

比定は本草学の重要な課題であった。したがって、本草学では1品に複数の名称を付記することは通常の記載法であった。品名には「英・羅」の注記のあるものもあるから、櫟齋はイギリスの博物書を参照したのである。手元にはフランスの博物書があったはずだが、「予奉命在御艦上数日、一日見洋書数十部焉。有着色艸木譜一卷即仏郎人フリユメ之所著、印度地方之艸木頗尽之。図中有此物、然其語即仏国之語、島中有訳官堀某、亦不能読之 可慨耳」とあって利用できなかったのか、フランス名の記載はない。デクには「蕃名ウリ〜 英/物印望ニアメリカノ葛ナリト云」とある。「物印望」は「物印満」の誤りだろうから、物印満（ウェインマン）の博物書を参照したことが判明する。これは江戸に帰ってからの注記であろう。品名の典拠として挙げられる注記は「蔵器・花戸・小野・喜任・伝信録・将翁・唐本草・広志・井ノ口・証類・堀氏・八丈方言・嶺表録・久之・海島逸史・江戸・本経・セーボレ」。中国の本草書が多く参照されているのは当時の本草学のありかたから当然であろうし、貝原益軒『大和本草』や小野蘭山『本草綱目啓蒙』など日本の本草書が参照されていないのは、これら日本の本草書には亜熱帯植物が記載されていなかったことによる。「小笠原鳴之巡見御開拓筋取調候趣申上候書付」に「是迄見分不仕奇草異木のみにて、此度召連候小野荅庵も何分見分ケ兼候趣」とあったように、櫟齋も、これまで見たこともない植物には、馴染んできた日本の本草書も参考にはならなかったのである。唯一日本の先行本草学者として将翁が参照されており、ここにも櫟齋の将翁への思い入れが窺えよう。「花戸・江戸・八丈方言」のように江戸の植木屋の呼称、江戸の通称あるいは八丈島方言、小笠原住民セーボレからの聞き取りを採用していることも当時の本草学では普通のことである。「小野・井ノ口・堀氏・久之」は小野荅庵、井口栄春、通訳の堀一郎である。久之は不明。これら列挙された名称は、本書においては必ずしも一品に多くの名称があるということではなく、それぞれの案であり、慶応元年になっても未だに結論が出ていないことを示していよう。興味深いことに、なかには「母島クチナシ・島ヤツデ喜任・島ホウノキ・シマミカン・シマトウギ」のように「母島」や「シマ」を冠した名称がみられ、これらは櫟齋が小笠原に固有の植物と判断した結果であろう。このほかにも、当時の本草学者たちはパインアップルに漢名の「鳳梨」を充てるが多かったにもかかわらず、櫟齋は「シマナシ」の名を与えている。

形状の記載は当時一般の本草学書と同様であるが、それらの利用法を考案するのも重要な任務の一つであったから利用の可能性や殖産への提言を多く載せているのが特徴である。

薬種として挙げられるのはセンダンのみで、次のような記事が付される。「実ハ都下近郊ノモノヨリ長アリ。味ヒ苦寒ニシタ(テカ)、実ニ苦棟子之名ニ背カズ。薬用ニ供スベシ。古方ニ枝皮樹皮根皮トモニ用ユ。コレヲ試ミルニ悉ク苦寒ナリ。依テ 官ニ奏ス」。

櫟齋の大きな任務の一つが八丈島からの移民を成功させることにあったから食料の確保は最重要であった。もっとも多い記事は、以下にあげるように食用に適するか否かである。

「サボイノキ／コノ樹ヲリ樹梢ノ三尺ノ所ハ煮熟シテ食フベシ。予モ亦コノ樹梢ヲ煮テ食フ。味ヒ笋ト芋茎トノ中間ナリ。予コノ樹ヲ製シテ麵ヲ得ント欲シテ、未其方ヲ得ス。時候ノ互ヒシニヤ。此地在留ノ中ニ再三製シテ、其法ヲ得ンコトヲ思惟ス」。「シマナシ／熟スルモノヲ切りテ食フベシ。味ヒ梨ト蜜柑ヲ合セ食フニ似タリ。酸甘ニシテ美味ナリ。(中略)塔上ニ葉ヲ生シ、塔ノ本ヨリモ笋ノ如ク、又六七ノ小長塔ヲ生ス。コレヲ植テ又株根ヲ得ベシ」。「チ、ノミ／実ハ胡桃ニ似テ尖リ両端ノ背モ齒アル如シ。(中略)異人ノ小兒コレヲ割り食フ。柿核ノ如キ白核二片アリテ食フヘシ」。「ニガチサノキ／嫩葉柔ラカ故ニ食フベキヤト思ヒ、コレヲユビキテ味フニ苦クシテ食スベキモノニ非ラス」。「キン九年ボ 蕃名オレンジ英／実大サ回青橙ノ如クニシテ、十月一日ニ節小雪也、黄色ノモノアリ又青色ノモノアリ。穂ノ大サ二寸ヨ、ハハ六分許ニシテ、味ヒ酸甘ニシテ美ナリ」。「シマミカン 漢名檸檬／実ハ八月比ニ矮鶏卵ノ大サニテ綠色ナリ。熟スルニ至レハ皮ハ甘味ニテ食フベケレトモ、肉ハ酸ニ過テ食スベカラズ」。「キアラセイ／(葉は)柔軟ナリ、燻キテ食フ」。

次に生活資材や殖産に関するものに注目している。「アヂマサ／異人、屋ヲ覆フ。島ニ至リ、予モ亦屋ヲ覆ヒ屋ヲカコヒ、或ハ葉ヲ採リテ二葉ヲ合セテ掃帚トス」。アヂマサは漢名「蒲葵」とあり、「豆嶼行記」文久2年間8月17日に次の記事がある。「大村異人ノ住居入りロニ門外ハ蒲葵ノ葉ニテ異様ナレドモ、中ハ板ジキニテイスモアリ、額モアリ。寢所ハ別間ニシキリサラサノ帳ヲ下ゲテ見ル可ラズ。(中略)柱ハ雜木或ハ蒲葵ナリ」、或いは同廿日には、鶏卵を売りに来た「異人二人、蒲葵葉ニテ、カマス様ノモノヲ作り入レ来ル」と蒲葵の利用法を観察している。「木アタン／異人笠ニ造リ、又席トス。即アンヘラナリ」。「ハスノハギリ／実ハ円ク磊々トシテ淡青色、ヲ、イサ龍眼ノ如ク中ニ核アリ。熟スレハ無患子ノ如ク、磨スレハ光沢アリテ念珠ニ造ルベシ。(欄外に、「九月十八日念珠ヲ造ル」の朱筆)。「ヤマカバシ／材ハ蠹ト衣魚ヲ避クル。箱ヲ作りテ、ヨロシカルベキヤ。コレヲ 官ニ奏ス」。

樫齋の記す利用法はすべて食料や建築資材であったが、明治8年以降の再開拓にあたって試みられたのも、やはり食料や材木を目的とした農産物の移植栽培であった。明治期には文久年間の調査・経験を踏まえて、小笠原産の作物を栽培するよりも、気候風土を生かして西洋から亜熱帯性の種苗を輸入して栽培することになった⁶³⁾。コーヒーやゴムなどがその一例である。樫齋の調査が役立った例もある。パイナップルやレモンである。パイナップルはシマナシとして「熟スルモノヲ切りテ食フベシ。味ヒ梨ト蜜柑ヲ合セ食フニ似タリ。酸甘ニシテ美味ナリ。(中略)塔上ニ葉ヲ生シ、塔ノ本ヨリモ笋ノ如ク、又六七ノ小長塔ヲ生ス。コレヲ植テ又株根ヲ得ベシ」と樫齋も栽培を勧めていたし、レモンはシマミカンの名で「実ハ八月比ニ矮鶏卵ノ大サニテ綠色ナリ。熟スルニ至レハ皮ハ甘味ニテ食フベケレトモ、肉ハ酸ニ過テ食スベカラズ」としていた。後者はそのまま生で食べるのには酸味が強すぎるとされたが、明治になってレモン汁からレモネードを製造し、あるいはコチニールによる紅色染めに利用できることが知られたため、小笠原での増産が試みられたのである。樫齋は亜熱帯性の動植

物に疎かったが、それなりの成果をもたらしたといつてよい。文久年間には開国したとはいえ、未だ海外の産物事情や栽培技術がそれほど知られてはいなかった。明治以降、それらの知識や技術が急速に入って来たことによって、もはや樗斎のような幕末の本草学者の経験を直接生かすことは時代遅れとなったのである。しかし、樗斎もそうであったように、これ以降、幕末期の優秀な本草学者たちは開成所の物産学部門の一員として急速に西洋の知見を広め、明治期の殖産興業策を支えたのである。樗斎が開成所の物産学世話心得であった際の物産学教授は幕末期の本草学の系譜をひく田中芳男であった。明治期の殖産興業策に田中芳男が果たした業績の背景には樗斎のような人々の支えがあったのである。まもなく西洋に留学し西洋の学問を直接学び取った人々にとって代われ、制度的にも西洋近代の学問体系が移入されることになる。本草学もその枠組みの中で純化され博物学が成立する。小野職慾(荅庵)も田中芳男とともに博物局にあって明治初期の博物学の成立と啓蒙に活躍した。幕末から明治中期頃までの殖産興業策に本草学者の果たした役割は決して小さくなかったのである。庶民の「厚生利用」を掲げた本草学は現在の学問のあり方からみれば総合的な学問として雑多な要素が多く、西洋近代の学問からみればいわゆる純正科学ではないだろう。しかし、本草学は生活に根差した自然学として優れた総合学でもあった。本草学の衰退と学問の分化は、また自然と生活の遊離を意味するものでもあった。本草学は学問として未分化ではあったけれども、その背後には常に人々の生活とその厚生利用という大目的が据えられていたのである。

註

○写本類については所蔵機関名を以下のように省略した。なお当館所蔵本の請求記号は、〈 〉内に、他の所蔵機関の請求記号は、[]内に記載した。

国立国会図書館→国会、内閣文庫→内閣、明治大学図書館→明大、東洋文庫→東洋、東京国立博物館→東博、西尾市教育委員会岩瀬文庫→岩瀬、武田科学振興財団杏雨書屋→杏雨、名古屋市東山植物園→東山、金沢市立図書館→金沢

- 1) サツマイモは享保12年には八丈島へも試植されている。近藤富藏『八丈実記』に次の記事がある(『日本庶民生活史料集成』第1巻 三一書房 1968 733頁)。

白サツマハ享保十二丁未年三ヶ島ノ人民ヲアワレミマシヘテ琉球国ヨリ獻シタルヲ、有徳院様ノ其種ヲ賜フ。樗立村名主台命ヲ蒙リ、八丈島村々ニ植付ル処(中略)、根ニ径リ尺バカリノ大芋アリ。人々驚テ炊キ食フニ柔ニシテ味ヒナシ。国^{こゝに於て}地ニ至リ植方ヲ習フテ蔓ヲ地ニハワセテ少シノ美味ヲ得タリ。(中略)

文化九年壬申年秀右衛門倅小源太武達ハNST云フ薩摩芋ヲ国地ヨリ持参ス。始メハ土地ニ相応セス。天保ノナカバヨリヤウヤク地味ニ合シテ、八丈、小島、青ヶ島マテ農家各々数百俵ノ美味ヲ収納シ、一万ノ生民ハジメテ年々餓死ノカナシミヲ忘ル。

- 2) 島谷市左衛門について、『改訂増補 幕府時代の長崎』(長崎市役所編 臨川書店 1973 初版は1903) 252~53頁を引用しておく。

島谷市左衛門ハ泉州堺ノ人ナリ、父九左衛門航海術ニ精シク屢々唐土ニ航ス、元龜中長崎ニ移リ一家ヲ構フ、市左衛門亦父ニ肖テ航海術ニ長ズ、寛文九年代官末次平藏命ジテ唐船ヲ模造セシメ、工成ルニ及ビ市左衛門ヲ艦長トナシ江戸ニ到ラシム、市左衛門之ニ乗ジテ江戸、南部等ノ各地ニ航ス、延宝三年閏四月四日幕府ヨリ小笠原島探検ヲ命ゼラレ、中尾庄左衛門及ビ江戸ノ大工金兵衛等ト共ニ、下田ヲ解纜シテ二十五日小笠原島ニ達シ、居ルコト三十一日、六月五日島ヲ発シテ二十日江戸ニ帰リ具サニ所見ヲ報ス、所謂徳川時代ニ於ケル小笠原島探検之ナリ、元禄三年病ヲ得テ長崎ニ歿ス。

- 3) 『島谷市左衛門無人島乗渡覚書(扉題)』(写本1冊 明大 芦田伊人旧蔵 [299-1])。本書には、「無人島渡唐船之儀付書留ノ漂流之覚ノ中榮咄シ聞書」が合写される。このほか、『延宝無人島巡見記』(写本1冊 岩瀬[87-73])、『小笠原島紀事』(内閣[271-69]) 33冊のうち第28冊「無人島巡査記」などの写本が残る。引用は明大本により、ごくわずかの虫損は他で補った。

『小笠原島紀事』全32巻33冊は小笠原の再開拓を期して外務省において編纂された。当時知られる限りの小笠原関係史料が網羅される。坂田諸遠を主任として明治7年3月成稿。内閣文庫には4部所蔵されるが、本稿では外務省本によった。その後、『小笠原島紀事拾遺』(8巻8冊 内閣[271-418])が編纂され、巻之5～巻之8には服部帰一の航海日記「南島航海日記」が収められる。本書は明治政府の開拓船が出港する2日前に成稿している。

- 4) 磯野直秀氏は島谷の記録した博物誌関係記事を検討された(『延宝3年の小笠原諸島巡見』『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』No. 22, 1997)。
- 5) 「無人島」は「ぶにんしま」と読むと思う。吉田東伍『増補大日本地名辞書』(富山房1902)では「ぶにん島」とする。あるいは「むにんしま」かも知れないが、「むにんとう」(『国書総目録』)や「むじんとう」とはいわなかっただろう。因に英語では Bonin Islands といった。
- 6) 『諸州薬品考』と題する写本がある(杏雨[杏-5398])。本書の成立事情は明らかではないが、本文末に「右伊豆国八丈島工植付ケ然ルヘキ品御座候訳、此伊豆ノ八丈ハ甚タ暖国ニテ(中略)異国渡リノ品寒気ヲ恐レ候モノハ御先例モ御座候ニ付(中略)御植付成サレ候ハ、宜敷ク奉存候。(中略)別テ縮砂、杳香、肉桂、甘蔗ノ類、御植付モ御座候ハ、増長仕易ク行々御国益ニモ相成り申ヘクト奉考候。」と、八丈島に薬園を開いて輸入に頼っていた暖地性の植物を栽培すれば国益になるとの提案がなされている。

本文末には、本書の成立にかかわる次のような識語「此書也、東武之医官丹羽正伯筆記之而、備(平出)有徳君之台覧。爾後、野呂元丈、田村元雄増補焉。」がある。識語が事実を述べるか疑問が残るが、上記の提案は田村元雄によるものと考えられる。磯野氏は「本書は田村藍水の著作と考えてよいのではないだろうか」とされた(磯野直秀「田村藍水の『諸州薬品考』」『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』No. 21, 1997)。

元雄の長男田村元長には『豆州諸島物産図説』(写本3冊 明治24年2月松田直人の筆写国会<特1-270>)の著がある。寛政3年の伊豆諸島巡見の際の調査をもとに成立したと考えられる。本書の「豆州諸島物産図説目次」によれば、巻一…草部上(80品)、巻二…草部下(78品)、巻三…木部(63品)・石部(6品)、巻四…虫魚部 禽獸附(48品)、巻五…海中雑品ノ海藻類39種・海綿類9種・鐵樹類18種・ウミヅル2種、通計370種が収録され、それぞれに図と説が附される。「其余庶物名ト物ト異論ナキノ属ハ只其名ヲ巻末ニ識ス耳」として「諸島物産図外之品二百二十二種」として品名を列挙する。本文中には「八丈島・三宅

島・新島・神津島・大島・三蔵島」の地名がみえる。本文中に頻出する「善之按」の按文は田村元長（号西湖・字善之）によるもの。

上野益三氏の紹介された『豆州諸島物産図説』とは巻の編成や内容に若干の異同がある（『日本博物学史』平凡社 1973 419頁）。

- 7) 三島勘左衛門『伊豆七島風土細覧』（『日本庶民生活史料集成』第1巻 三一書房 1968 639頁）による。
- 8) 太田彦助『廻島雑話』（寛政9年序 自筆稿本3冊 内閣 [173-178]）に、寛政8年のこととして、「大賀郷の内に（中略）先年御医師田村玄長老、渡海して薬草を植えしか、今は唐茗荷・草肉柱載なりと云」（中巻第28丁裏～第29丁表）とある。
- 9) 近藤富藏『八丈実記』（『日本庶民生活史料集成』第1巻 三一書房 1968 741頁）に、「天保十一庚子年八丈島大概帳」が引用される。これによれば、寛政5年にも薬草木の植え付けがなされている。
- 10) 「昭徳院殿實紀」（『統徳川実紀』第4篇 164頁 吉川弘文館 1975）。
- 11) 「小笠原島之巡見御開拓筋取調候趣申上候書付」『小笠原島開拓掌記』（内閣[173-177]）中巻 第3丁裏～第11丁裏。
- 12) 寛文10年（1670）のミカン船による無人島発見の記事は、いち早くケンペルの『日本誌』（1727年刊）によってヨーロッパに紹介された。また、1817年にはフランス人アベル・レミューザが林子平『三国通覧図説』の無人島記事を地図を添えてフランスのアカデミーの機関誌に紹介するなど、この島についての知見はヨーロッパに広まっていた（田中弘之『幕末の小笠原』中央公論社 1997）。
- 13) 磯野氏は開拓事業にかかわった船と乗船した本草学者たちの一覧を示し、かれらの小笠原滞留期間を明らかにされた（磯野直秀「文久年間の小笠原探検」『慶應義塾大学日吉紀要自然科学』No. 16, 1994）。
- 14) 小野苓庵（1838～1890, 53歳）、名は職もとよし懋、薫山と号す。苓庵は通称。上野益三『日本博物学史』平凡社 1973, 同『博物学者列伝』八坂書房 1991, 『国書人名辞典』岩波書店 1993 は苓庵とするが、筆者が調査した史料ではすべて苓庵であり、懋の名は見えない。小野職孝（懋もとよし）の次男で、小野蘭山の曾孫にあたる。『植学訳筌』（1874年刊）、『植学浅解初編』（1875年刊）などを著し、また田中芳男とともに飯沼慾齋の『草木図説』草部20巻の増訂版を出版するなど、明治初期の博物学の成立と啓蒙活動に大きな貢献をした。
- 15) 『小笠原島開拓掌記』（3巻3冊 内閣 [173-177]）中巻 第11丁裏～第12丁表。
- 16) 『小笠原島紀事』巻之11では、編者坂田諸遠によって「別冊本丸灸炎ニ焼失セシヤ今伝ハラス」とされている。しかし、これらは『小笠原島物産録』、『小笠原島草木押葉』として残る。

小野職懋『小笠原島物産録』（自筆稿本1冊 杏雨 [杏-1303]）。青色の表紙、四針眼。縦124×横169ミリ、厚さ約7ミリ。書題簽で「小笠原島物産録」。扉には「小笠原島物産録」の墨書。右下に「小野職懋」の署名（両側に縦線）に「小懋」の丸朱印（直径縦10×横11ミリ）を捺した紙片が貼付される。本文は墨付15丁。巻末に遊び2丁。用箋は無枠無界線の楮紙。染みの汚れあり。

- 17) 小野職懋『小笠原島草木押葉』（自筆稿本2巻2冊 国会〈特1-3045〉）。淡褐色の表紙、四針眼。縦326×横235ミリ、厚さ各約4ミリ。第1冊の題簽は逸失して剝がれた跡が残る。第2冊の題簽（枠無し、縦229×横35ミリ）は「小笠原島草木押葉 二」。第1冊の巻末に小野

職歴の識語があることから、第1冊と第2冊が逆ではないか。第1冊の題簽が剥がれた跡は第2冊に貼られる題簽と同寸法なので、2冊とも題簽が剥がれた後に題簽を貼り間違えた可能性がある。本来は第2冊と第1冊が逆だったと思われるが、ここでは題簽に従っておく。2冊とも目録は無く、本文は押し葉を添付した脇に品名が記される。ただし、ほとんどの押し葉は逸失している。

18) 『小笠原島開拓掌記』(内閣 [173-177]) 中巻 第31丁裏~第32丁表。

19) 『同上』中巻 第59丁裏~第61丁裏。

20) 宮本元道(文政8年(1824)~?)は病没した新発田収蔵の後任として蕃書調所の絵図調出役となった(倉沢剛『幕末教育史の研究』— 1983年 吉川弘文館 293頁)。宮本は蕃書調所で訳出されたペリー『日本行記』に付されたウィリアム・ハイネによる挿絵を模写している(『同上』293頁)。この挿絵には小笠原のものも含まれていたはずである。

内閣文庫多門櫓文書[多門櫓-8375]には「一、金五兩 御手当一ヶ年/一、七人扶持戸田采女正家来絵図調出役 宮本元道 当卯三十六歳/宿所赤坂溜池主人屋敷内/安政六未年十月廿九日開成所絵図調出役被仰付候」とある。

『日本教育史資料』第7巻 文部省 1892年の「蕃書調所の教授方一覧」「絵図調」に「戸田采女正藩士(浅野一学家来)宮崎元道」とある。『御支配明細帳』にも多門櫓文書と同様の記事があるが、その記事の左端に「宮崎元道 [印鑑]」とある。あるいは元道の旧姓は宮崎だったのかもしれない。

文久元年9月蕃書調所物産局の物産学出役を命じられて江戸に下った伊藤圭介は、大垣の江馬活堂に宛てた書簡(文久元年十月十二日付)に「宮本氏調所絵図方御勤之由左候ハ、追々御世話ニも可相成御序之節宜御頼置可被下候」(江馬文書研究会編『江馬家来簡集』思文閣出版 1984 103頁)と書いており、この時は未だ元道とは相識ではなかった。同じ蕃書調所に勤務するうちに知り合うことになったのだろう、同人宛書簡(同年十二月二十二日付)では「無人島へも去三日出帆、咸臨丸被遣候、水野筑後守被参、調所よりハ貴藩之宮本元道并堀達之助俣も参申候、又跡船者千秋丸近来御買上之御船、是ハ栗田万次郎(当春ナゴヤ拙宅へ来訪、儒者ニテ西学本草モ好、宮津藩)も参申候」(『同書』105~106頁)と宮本元道が咸臨丸に乗船して小笠原に向かったこと、遅れて千秋丸で栗田万次郎が小笠原へ向けて出帆したことを報じている。栗田万次郎は文久元年春に名古屋の圭介を訪問しており、圭介が名古屋にあった頃から交流があった。こうした関係から圭介のもとへは公的には物産局宛に、また圭介宛の私信でも元道や万次郎からの小笠原に関する情報もたらされたのである。

22) 宮本元道『小笠原島真景図』(折本3帖 縦300×横260ミリ 国会くさ-70)。第1帖…「小笠原島真景図 乾」、第2帖…「小笠原島真景図 坤」、第3帖…「小笠原島所産鱗介図 完」。3帖とも絹張りの表紙。中央に題簽(絹布、青色刷の子持枠。枠内:縦167×横33ミリ)で、上記の題が墨書される。見返しは金片散らし。3帖とも「大正/9.5.11/購入」の青色スタンプ、「宮本/蔵書」(縦32×横21ミリ)の朱文方印あり。見返しに貼付される紙片に「宮本小一先生愛蔵/文久二年ヨリ三年迄/小笠原島真景図 貳帖/附所産鱗介之図 一帖」と墨書される。

本書の蔵書印は『小笠原島風土略記(題簽)』(写本1冊 国会くさ-70)の本文巻頭にもみえる。ともに明治2年に貴族院議員として小笠原開拓を建白した宮本小一のものである。後に述べるように、これらは明治2年に宮本小一が小笠原再開拓の建白書を提出した際に

添えられた。宮本はこれらを小花作之助から借り受けたまま返却しなかったらしいから、本来は小花作之助の旧蔵書であろう。

- 23) 『宮本宗伴無人島紀行』(写本1冊 岩瀬[30-21])。濃青色の表紙、四針眼。縦225×横161ミリ、厚さ約2ミリ。書題簽で「宮本宗伴無人島紀行」。内題は「無人島行略記文久元年辛酉十二月水野筑後守殿ニ附添發船、二年壬戌三月帰府」。内題の前に「大垣藩宮本宗伴男元道無人島へ罷越、先達而帰国説話。父宗伴書記之写し」の識語がある。全5丁。巻末に図1葉が綴じ込まれる。書名は『無人島行略記』が正しいが、ここでは混乱を避けるため岩瀬文庫の表題(題簽による)に従っておく。

なお、伊藤圭介『小笠原島産物記』(写本1冊 東山伊藤文庫[6-33])には、「小笠原島産」として植物の記事と印葉図がある。中に「溜池戸田侯一宮本元道」のメモもみえる。これらの植物の記事は蕃書調所物産局に収められた小笠原調査報告書によるのであろう。

- 24) 栗田万次郎は名を昭、湛斎と称した。本所駒止石、のち根岸金杉村に住んだ。当時の人名録(『江戸現在 広益諸家人名録三編』文久元年刊、『文久文雅人名録』文久3年刊)には儒者として記載されているが、本草学者としても著名であった。

文久元年9月幕府の蕃書調所に物産局が設置され、その物産方出役として出仕した伊藤圭介の日記『伊藤圭介日記』(国会〈特7-440〉)の文久元年3月21日記事には小笠原滞在中の栗田万次郎から書状が届いたとある。また、帰国した咸臨丸から小笠原には「大なる蝙蝠」や「大ナルアヒル」がいると物産の様子を書き留めている。オオコウモリは『宮本宗伴無人島紀行』に母島父島「両島共、蝙蝠大サ三尺許、沢山ニ居。已ニ一疋生ナガラ持帰り、献上ニ相成候」とあった。また、(6月16日)には栗田万次郎が秋迄在留し、その後は阿部燦斎が交代するともみえる。当然ながら、蕃書調所物産局にあった圭介のもとには小笠原の情報もたらされ、物産局も小笠原の殖産に協力していたのである。『伊藤錦窠先生遺書』(岩瀬[154-67])所収の「物産学に付存寄之趣申上候書付」(文久2年12月)には「小笠原島産物も近年追々航海有之、物産家も被遣候義に付、右諸島産物も御取寄調所へ相成廻候様(下略)」の一節がある。

栗田万次郎は明治7年7月から9月には台湾の産物調査に、ついで明治8年5月には琉球の産物調査に出掛けている。江崎佛三氏は栗田の琉球旅行を明治8年11月以前とされ、あるいは明治7年の台湾征伐の帰途立寄ったものではないかとされた(伊藤篤太郎「隠れたる博物学者栗田万次郎を偲ぶ」の附記『台湾博物学会会報』第26巻第149号、1936年2月)が、以下の記事から、栗田の琉球行は明治8年5月から8月にかけてであったことが判明する。「吾去る明治八年五月欽命を奉して琉球国に航し那覇の港に駐り、該地の産物を採集せし折柄」(「第二号楨の疑問に付栗田万次郎君より寄贈せられたる答書」、『工業新報』第4号、1877年7月28日発行)。

栗田の著書として『琉球産物報単』(写本1冊(本文11丁 彩色図譜(一部無彩色))9丁国会〈特1-55〉)が残る。第5丁表には「方言『タイモ』多ク首里近傍ノ水田中ニ栽ユ。

(中略)此種、亦小笠原島ニモアリ。其味、琉球ノモノヨリ劣ル。小笠原島ノ土人ハ、コノ種、其初『サンビツチ』島ノ土人ハ『タロ』ト唱フルモノ是ナリ。」と、小笠原島での経験を参考にした記述がみえる。

なお、伊藤篤太郎「隠れたる博物学者栗田万次郎を偲ぶ」には万次郎は小笠原島で日記を付けていたらしく『南航日記』という紀行があるとのことだが未見と記す。長谷川仁氏

は「『南汎日記』は3巻あったものと思われるが、今遺っているのは巻3のみで6月1日から帰着までの分が漢文で記されており、巻末は忘備のメモとして植物彩色図や島民から教わった土名・英名・動植物目録などが録されている」という（長谷川仁「栗田万次郎海外調査のこと」、『自然』1977年2月号）。『南航日記』と『南汎日記』は同じものをいうのだろうか。筆者は未見。『小笠原島紀事』巻之25第27丁表に『南汎録』5月28日の記事が抄録されている。

- 25) 井口栄春の経歴は未詳。同じく岸和田藩医で、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』を重訂し、新たに図譜を付して刊行(1850年)した井口望之(楽山)、嘉永4(1851)年11月、医学館において『救荒本草』を講じた岸和田藩医井口栄達は栄春の血縁者か。

樸齋の薬品会の鑑定手伝採用願には井口栄達(樸齋の前任者か)の「例書」が付されている(『医員勤功書』第十六 金沢〔特16.88-19〕)。

例書

岡部内膳正家来

井口栄達

右栄達儀、嘉永二酉年四月医学館薬品会之節、鑑定手伝相勳候様、書面之通可申談旨以御書取被仰渡候、

書面之通、可相勳旨可被申談候事、

- 26) 『小笠原島紀事拾遺』(内閣 [271-418]) 巻之2 第38丁表~裏。
27) 『同上』巻之2 第20丁表~裏。
28) 『小笠原島紀事』巻之11 第74丁裏~第77丁裏。
29) 小花作之助『小笠原島風土略記』(国会 <さ-70>) 第33丁表。
30) 栄春の植物写生図は残念ながら未発見。弘前医官渡江氏旧蔵の『弘前軍符』(写本 1冊 国会 <237-221>)の巻末識語によれば、本書は井口栄春が桐淵直弥手抄本を借り受けて渡江氏のために抄写したものという。栄春は本草学者として当然のことではあるが、こうした絵画にも巧みであった。

栄春は文久2年閏8月15日離島帰府したが、明治になって小笠原の再開発のために設立された「無人島開墾社」社長谷陽卿によって「下総銚子住民 真一郎」とともに小笠原へ派遣され、明治3年正月27日から2月14日まで同諸島の現況調査にあっている。栄春は直助とも称したらしい。谷による報告書では「東京深川新田住人 井口直助」とされ「直助義ハ先年旧幕ノ時此島へ出役シテ二ヶ年余モ在住シテ風土ハ篤ト存知候者ユヘ此度遣シ置申候」という(『農務顛末』第6巻 農林省 1957 429頁)。

- 31) 樸齋の経歴には不明な点が少ないが、略記しておく(別稿を準備中)。樸齋の没年は明治3年10月19日説と同10月20日説とがあったが、阿部家菩提寺梅林寺(曹洞宗、台東区三ノ輪1-27)に残される過去帳によれば、明治3庚午年の欄に「土宝珠院殿義簪華将居士 十月十九日 阿部将翁」とあるから、樸齋の没年は明治3年10月19日と確定できる。この過去帳には慶応2丙寅年に「土東壽院潭室妙操大姉 七月十五日 阿部老母」、明治3庚午年には「宝信院天安道益大姉 四月十四日 安部将翁 妻」が載っている。その俗名が知られないのは残念であるが、樸齋の母の諱が東壽院潭室妙操大姉、また妻の諱が宝信院天安道益大姉であることが判明した。なお、樸齋の曾祖父将翁(照任)の没年を含む過去帳も残るが、虫損が激しく開けない状態という。

阿部樸齋について、上野益三氏は「喜任、通称友之進、字は亨、樸齋または巴菽園と号

し、江戸の生まれ。阿部友之進(将翁)の曾孫で曾祖父と通称が同じため、混雑することがある。岩崎常正に本草を学び、江戸本石町にて本草を講ずる。また英語をよくする」とされ、樸斎の名として喜任・友之進・亨・樸斎・巴菽園を挙げた(『年表日本博物学史』八坂書房 1989年)。樸斎の著『隠居放言』7巻の各巻巻頭には樸斎みずから別々の号を記しており、「樸斎・静春・鳳仙・澹圃・又新・蔽牛・榭町」の号が知られる。また、樸斎自筆の日記『公私日録 壹』(国会 <W391-22)の表紙には「嘉永七年甲寅之/正月吉日 又新堂」、裏表紙には「又新堂主人/額外之人」とあるから「又新堂」が樸斎の書斎号であることが確認できる。

なお、『草花図譜』(写本1冊 東博 [和-1033])に付した樸斎の緒言に祖翁照任は「今より百四年前、宝暦四(1754)年に昇天せしなれば」という。現在いわれている宝暦3年没とは1年のずれがある。

- 22)33) 清水磯洲『ありやなしや補遺』、『森銚三著作集』第6巻 中央公論社 1989 173頁による。
- 34) 樸斎の随筆『又新堂随筆』(第15丁裏)の「先年予か友人足立長雋、予ニ語りていふモミチの大樹にて糖を製し試みたしと」の記事から、樸斎が足立長雋と親しい交友があったことが判明する。足立長雋は吉田長淑門下の蘭方医で西洋産科の祖とされる。長雋には『胡椒説』なる訳書があるから、樸斎の胡椒についての知識は長雋から得たのかもしれない。
- 35) 『小笠原島紀事』巻之5 第41丁裏~42丁表 第45丁表~第46丁裏。
- 36) 佐藤昌介『洋学史研究序説』岩波書店 1964 283頁。
- 37) 東条琴台『増訂伊豆七島全図 附無人島八十嶼図・相武房総海岸図』天保13年刊、1舗は林子平『三国通覧図説』の附図「無人嶋大小八十余山之図」(天明5年刊)をそれまでの伊豆七島および無人島の情報(とくに南島高暢の『南島雑志』)を参照し、増補訂正して成ったもの。校訂には琴台の門人、江戸 阿部樸斎、伊豆 高田信頌、弘前 傍島正心の3人が当たっている。本書は絶板を命じられたという。樸斎と琴台はこれ以前から親しい交流があったようで、樸斎の著『救救拳要』天保4年9月には琴台が序を寄せている。
- 38) 阿部樸斎『又新堂随筆』(自筆稿本1冊 東洋 [三/MC/11])。第17丁表に「慶応二丙寅之年九月十三日」の日付がみえるから、本書の成立は慶応2年か。淡黄色の表紙、四針眼。縦241×横165ミリ、厚さ約6ミリ。書題簽(四周单边)で「又新堂随筆」。ただし、この題簽は後で付されたもので、内題はない。扉は手擦れのため汚れあり。扉の左端に「又新堂随筆 底稿」とある。扉裏に「予幸に祖翁之遺業を奉し先君之教に頼り、負担之勤勞を免かれ旗を負て御 国に耕し、花を植へ芳を養ふて身を立て名を掲げ土宇広開く」の識語あり。「又新堂消暑録卷之七分目(目録)」2丁。ただし、目録の表題と本文の内容は何故か一致しない。本文は全23丁。4種類の用箋が用いられており、そのうちには版心に「又新消暑録/卷 /巴菽園菜本」と刷られるもの、「占恒室」と刷られるものがある。巴菽園は樸斎の、占恒室は久志本左京(緑猗軒)の堂号である。久志本氏は天保期の本草研究会「繕鞭会」のメンバーと親しい交流のあった人物である。樸斎が久志本氏と本草を通じた交流を有した可能性は大きい。記事の中に「子や、小笠原島にありて、日月の長きを覚へ、又北海道にても日月の長きを知りたらは、実に人界を離れし仙人の境に入り仙女交権の理と同じ、長生之閑何の益あらんや」(第13丁表)、「田辺多一郎君南嶼にありし時の戯れに、元日や帰る仕度のかそへ初、年は戌[居ぬ]とし日は申[去る]事にしてと申されし。遠郷僻地にて古郷を思ふ心の切なるは、から国人も大和人も同じ心ならん。韓退之鄭尚書の、

嶺南に隸するを送る序に(中略)、鄭公の来帰の疾きを祝す、といふを以て合せ考へ人心の一なるを實に知るべし」とあり。

39) 筆者の目に止まった「将翁四世之孫阿部喜任」の署名、「将翁四世之孫」の朱印のある書を挙げておく。

1. 阿部樸斎『隠居放言』全7巻(杏雨[杏-1211][杏-1273][杏-4697], 岩瀬[34-43])所収「巴豆考」の記事の末に「文政十二歳次己丑秋七月/将翁四世之孫樸斎阿部喜任識」とある。杏雨[杏-1211]には貼紙による訂正の跡が多くみえ、樸斎の自筆稿本。岩瀬[34-43]は杏雨[杏-1211]の浄書本と考える。他はその写本。なお、本書には「又新堂百品考」の書名もある。
2. 阿部輝(照)任『硫黄益根元製正誤』寛保4年刊1冊(内閣[195-258])の後表紙見返しに「天保五甲午之春正月廿三日此書を得たり(中略)四世之孫/阿部喜任」の識語。
3. 阿部樸斎『草木育種後編』天保8年刊2冊。巻之上例言の末尾に「丁酉秋月移花日巴菽園主人識」として「阿部将翁四世孫」「喜任審定」の刷印あり。
4. 阿部樸斎『救嗽拳要』天保4年9月例言刊2巻1冊(元題簽は「豊年教種」)の例言末尾の署名に「樸斎」および「阿部将翁四世孫」の刷印がある。本書は西国の凶年に備えて書かれた書であるが、その例言で次のようにいう。

予先祖将翁先生享保十七年西州饑饉の時、辟穀の方を書して(平出)奉りしかは、試みて後に諸人に施すべしと(平出)台命ありし故に、翁自身に試みたり。時に行年八十六歳にてありけれども、起居生平の如くなりと申上げれば、上にも称美したまひ翁にも白銀を賜り、遂に此方を西州に教へて多くの人を救ひたり。予今茲先人の古事に比して此小冊子を記す。

ここにも、樸斎が家祖としての曾祖父将翁の事蹟に倣おうとしていることがわかるであろう。

なお、本書巻之下第4丁裏に「^{ちよしゆんあんかたふ}家父春庵賢任」とみえるので、樸斎の父の名は賢任、春庵と号したことが知られる。春庵には『本草纂言』(東博[和-180])の著がある。

5. 『草花図譜』写本1冊(東博[和-1033])。緒言に「この書は予か家にふるくもち伝ふ所なり。(中略)祖翁照任の見るに随而筆記せるものか。(中略)今より百四年前、宝暦四年に昇天せしなれば、こは其前にものせるものか。四世の孫阿部喜任しるす。安政四年丁巳の夏五月なり[「静春薬室」の朱文方印]。静春薬室は樸斎の書齋号。
- 40) 阿部樸斎『蝦夷行程記』安政3年11月刊上下2冊(岩瀬[7-13])。
- 41) 『又新堂隨筆』に「予や小笠原島にありて日月の長きを覚へ、又北海道にても日月の長きを知りたらは」(第13丁表)、あるいは「予今年北海道にて英人□□に聞しに」(第17丁裏)とあるから、その後北海道に渡ったのだろう。
- 42) 『小笠原開拓掌記』中巻 第52丁表~第54丁裏。
- 43) 安政6年4月、阿部樸斎は医学館の薬品会での薬品鑑定手伝に採用された。その採用願案文の写しが残る(『医員勤功書』第十六 金沢[特16.88-19])。

阿部将翁儀ニ付奉願候書付

多紀安常

町医師

阿部将翁

右将翁儀、物産之学年来研究罷在候間、何卒医学館薬品会之節、鑑定手伝可仕旨被仰

付被下置候様仕度、此段奉願候、以上、

未四月

姓名

文久2年櫛斎が小笠原島行を命じられた際、医学館での薬品鑑定として櫛斎の後任に採用された矢嶋忠球の願書には櫛斎の願書が例書とされている（『医学館帳』内閣 [195-365] 第44丁裏～第45丁表）。

- 44) 阿部櫛斎『豆嶋行記』写本（白井光太郎の筆写 1冊 国会〈特1-2970〉）による。本書はこのほか、天理大学図書館（上中巻のみ、林若樹写2冊）があるが、未見。
- 45) 『小笠原開拓掌記』下巻 第63丁表～裏。
- 46) 田中弘之校訂 解説『幕末小笠原島日記』緑地社 1983 による。
- 47) 阿部櫛斎『八丈本草』（自筆稿本 1冊 東博[和-216]）。黒紫色の表紙、四針眼。縦216×横131ミリ、厚さ約7ミリ。書題簽で「八丈本草」。扉に「八丈本草」とあるが、内題はない。本文墨付31丁（第15～23丁は白紙のまま）。田中芳男献納書籍。なお、杏雨 [杏-6058] は本書の昭和9年筆写本である。

第24丁～39丁には英語、蘭語の文章が筆写され、一部の単語には訳語が付される。櫛斎の学習の跡か。なかに聖書の一節と思われる英文がある。

本書について、磯野直秀氏は著者を「阿部喜任?」とし、「八丈島とは無関係らしいメモ帳」とされた（『東京国立博物館蔵『帝室本』本草・博物誌関係と書目録』『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』No. 21, 1997）が、櫛斎の八丈島でのメモ帳であることに間違いはない。

- 48) 寛政3年田村西湖によって肉桂・土茯苓・草菓・草荳蔻・檳榔樹・龍眼樹・甘草・使君子・カンテイレキ・シツカンラ樹・索厚朴之類などの薬草が八丈島に植え付けられ、天保3年当時も繁殖している薬草は、肉桂（唐種）2本、草菓（唐種）五株、檳榔樹1株であったという記録があるが、「あまくさ延喜式 甘草」は西湖の植え付けたものが残っていたのであろうか。
- 49) 『出放題集』（自筆草稿1冊 国会〈848-205〉）は櫛斎が八丈島と小笠原滞在中にその折々の所感を雑記風に詠んだ発句集である。巻頭には「赤道の直下に、や、近ければ、四時ともに艸木も、青々と見へ、鶯のさ、なきも、断へす窓の外に聞ゆるにそ、思ひづるま、を書きつけつ、見る人にも笑ひ給へとて／出放題集といふ／季のきかぬ季もなき出す発句哉」と書名の由来を述べている。これらの発句には推敲の跡もみえ、なかには『南嶋行記』に挿入されるものもあるから、詞書きとともに文字通り櫛斎の身辺雑記だったと考えられる。

なお、本書後表紙の見返しに、大槻如電が大正6年に櫛斎の子孫から本書を入手した経緯を記す。

- 50) 『小笠原開拓掌記』第112丁裏～第113丁裏。
- 51) 植木屋長兵衛は長太郎の誤りかもしれない。鶯嶋の植木屋内山長太郎は別称「笹長」（裁花園）といい、弟音吉・卯之吉とともに幕末から明治期にかけて著名な植木屋であった。かれらをよく知る栗本鋤雲は「維新以来益々大に用ひられ、大内の御苑より諸官省の庭園を始め、王侯貴族の家、皆翁の手を経て其の丘園かざりの責を為さる無ければ、人呼て花戸中の大閤と為すに至る」と書いている。鋤雲は「都下花戸の長字を以て名とする者多し」ともいう（栗本鋤雲「内山長翁・長太郎の略伝」『日本園芸会雑誌』88号, 1899年）ので、あるいは長兵衛なる植木屋があったのかもしれない。卯之吉が長太郎の男であることは確か

であろう。

- 52) 『小笠原島紀事』巻之12 第27丁裏～第29丁表。
- 53) ワートル。A. van de Water 著の薬物書（ブラッヘによる校補版、1834年刊）。これは林洞海により翻訳され『寤篤児薬性論』21巻18冊（天保11年訳成）として安政3年（1856）に刊行された。樫齋が購入を願ったのは翻訳書ではなく、オランダ語原本だろう。
- 54) 「右納織」は右納を用いた織物のことをいうのだろう。「右納」が何をさすかは不明。
- 55) この願書は薬品補充のための一時的な帰府願いのつもりだったようだが、帰府した後、樫齋は再び小笠原の地を踏むことはなかった。
- 56) 小花作之助『小笠原島風土略記』（国会くさ-70）第26丁表～第27丁裏。本書末尾には「右附録は予在島中文久元年辛酉十二月より見聞なしたる事、又自らの事をも記したり。渡来又開拓の事起りて若し用ゆる時を得は、予の幸甚也／小花作之助（花押）」の識語がある（下線は筆者）。この識語から、本書は止むなく中断した小笠原島開拓事業の再開に備えて、小花作之助が自らの経験・見聞をまとめたものであることが知られる。「附録」というのは、『小笠原島真景図』の附録という意味である。小花は宮本小一に本書と宮本元道『小笠原島真景図』（国会くさ-70）および英米蘭プロシア各国の公使との往復書簡抄録を貸与して再開発を訴えたのである。

明治6年4月27日、外務省編集課から「先頃宮本大丞より御相談之上、御書留并に小笠原風土略記及絵図等御恩借之分、其砌夫々謄写相成り備置候処、風土略記・地図は有之、今一冊之御書留何れへ紛入候哉、何分搜索之術、尽、毎度御氣之毒に候得共、再応借覽致度候」と問い合わせたのにたいして、小花は「御書面之趣承知仕。則、手控御用留一冊、島民へ対話書巻冊、外に全般御用立候附録巻冊、初発認候図冊式本共入御覧候」と答え、さらに外務省の「右之外、小笠原島一件関係之書類御手留、日記等に至る迄、不苦候は、御恩借に預り度候」との依頼に「承知仕候。則小笠原規則書巻冊、対話書抜巻冊、南島要録巻冊、奉差上候。右は手控御用留にも記載有之、重複之廉も候得共、任御達差上候。御照覧可被下候」と答えている。さらに小花の答には「水野服部之御用留は文久三年五月本丸炎上之節、小笠原島書類入用箱灰燼に属し候故、外に書留無之事と被存候」と、水野・服部の御用留は焼失してしまったともいう。また、外務省からの「小笠原島指掌全図等御所持に相成居候は是又借覧希候」に、「全般御用立候図冊之始に海之浅深等迄測量致し候図有之。然る処、右原図兼而申上候左院之官員方へ依頼貸出し置、催促もいたし候得共返却無之、戻次第可差上候得共、前件々御急之趣に付、此分譲後日候」と答えている（『小笠原島紀事』第24巻第54丁裏～第57丁裏）。『小笠原島風土略記』（国会くさ-70）は小花作之助の自筆と思われる（註22参照）。

- 57) ここに「龍眼肉 是ハ八丈島植付、不特来」と注されるのは、八丈島にも植え付けた後、小笠原へ向かう途中で誤って塩水をかけてしまって枯れたのである。同じく船中で枯れたという肉豆蔻に「生育ス 巻本」とあるのは辛うじて1本だけ助かったのであろうか。
- 58) 『農務顛末』第6巻 農林省 1957 474～75頁。
- 59) 『又新堂隨筆』第23丁表。

（前略）予や小笠原島にありし時、人家を見るに異人は皆、蒲葵和名あちまきの葉をとりて屋根も覆（おほ）ひ、又四方をもかこへり。八丈移民の家を作るにも、いにしへのさまおもひいてられ、柱は掘こみて建て、其うへに、はりをわたし、夫に其末と末に穴をうがちちきてふもの、古へのさまになし、又まれに横木を渡し屋根も四方も悉

くあちまきの葉以てせり。この島は土の性質もよく水の流れもありて、十分に諸産物の培養すべきの地なり。

○この島に來りて、樹木密箐の処に至るに、人の手の入らずして樹木の自然に生ずるを見るに、大樹も一虎口ひとご或は杖の如きも皆直立にして、竹の林に入るが如し。海岸の樹は怒濤おろしに根を洗らわれ、風に吹たをさるゝ処に、この如くにはあらず。

予この地にありし時に山に崩して道を作り、又家を造る為に岡を平らかにせし時に、地の性質を考るに赤殖の江戸にいふぢやまと唱ふる赤土の粘り強く渋き土なり。この土の上に樹葉葉根の土に化したるか八九寸ハ、あり。西洋人の百年にして一尺の土を生ずといふかこれなるや。又山の崖下に真土の砂まじりになりたる処もあり。常に再渡して樹芸せん事を思ふ。

60) 『日本教育史資料』文部省 1892 第7分冊 673頁。

61) 阿部櫟齋『南嶼産物志』(写本1冊 岩瀬[92-119])。薄茶色の表紙、四針眼。縦248×横170ミリ、厚さ約9ミリ。題簽はなく、表紙には何も記されない。扉に「南嶼産物志／木部 閏月十五日 菓 三十一種」。遊び紙第1丁裏に「南嶼産物志／木部 分目(略)凡三十五品」。内題はなくいきなり本文から始められる。扉1丁、分目1丁、遊び紙1丁、本文39丁。第1丁表に「岩瀬文庫」の朱印があるほかは印類なし。記事中に「文久三年癸亥ノ四月四日小満ノ候ナリ」の文字がみえ、また欄外には「戊ノ九月十五日」「戊ノ九月七日」「戊ノ七月十九日」の朱筆があるから、これらの記事は文久2年7月から同3年4月に記されたことがわかる。本文には版心に「又新消夏録／卷 / 芭菰園栗本」とある黒い刷り用箋が用いられる。版心の「卷」の下の余白に、右に寄せて、扱われる品名が墨書される。「芭菰園」は櫟齋の号で、このほかの櫟齋著書にもこの用箋を用いられるものがある。用箋および朱筆、貼紙による訂正の内容から、本書は櫟齋の自筆稿本と考えられる。杏雨[杏-5956]は岩瀬文庫本の写本である。また、岩手県立図書館(太[49・9~8])にも1本が蔵されるが未見。

62) 阿部櫟齋『豆嶼行記』文久2年9月20日の記事に「南嶼産物志ノ惣目ヲ草稿ス」とあるが、「南嶼産物志惣目」の所在は知らない。ここには木部のほか「草部・魚部・獸部」などの収録品名が記されていたはずである。

63) 『農務顛末』第6巻 農林省 1957の「小笠原島 第二 殖産始末」に詳しい。

(ひらの みつる 明治大学文学部教授)